パンフレット第四十一號

續南滿洲工業事情

南滿洲鐵道株式會社

庶務部調査課

凡例

一、本編の内容は在滿日本人工業に關する記述である。

二、凡そ三百餘の邦人工場に對し以下各章に該當する項目に就いて回答を乞ふたのであるが、好意を寄せられたもの百七十一に過ぎなかつた。

三、又質問事項が多岐に亙りたることゝ及び說明が徹底せざりしことに依り、貴重なる回答に萬全を期し難き憾があつた。然し繁忙の折柄此煩瑣なる質問を快諾し、記入の勞を取られたる工場經營者及び事務者に對して深厚の謝意を表する。

四、實際本編に於て取扱はれたる工場は百七十一の中百六十五であつて、除去せられたるものゝ中には、電氣、瓦斯事業及工業品製產に從事するゝ言い得ない性質の事業を含んで居る。電氣、瓦斯事業を除外せるは別に論ずるのが適當であるゝ思つたからである。

五、滿鐵の附屬工場は之を全部除いた。

六、本編は到る處事業別を以て記述せられて居るが、其分類の妥當ならざることは勿論である。分類を少くすれば甚しく性質を異にするものを同一類に入るゝの缺點があり、小細に分類すれば回答工場の少いこと、同性質の事業の少いこと等によつて種々の不便を感ずるといふ短所があり、事業別をなすに當つては常に此ヂレンマに陷る。本編の分類の如きも確に可笑しいと思はれ無理だと思はれる點があるが、已むを得なかつたのである。唯參考の

爲、如何なる工場が各業別に含まれたかを附記して置かう。

鐵工業――機械類製作、建築材料製造、造船等

染織工業――紡績、織布、毛織、製麻、製綿等

化學工業――硝子、ペイント、肥料、染料、石鹼、爆發藥、味の素等製造、製鹽

油坊業――硬化油、豆粕、豆油の製造

窯業――建築材料、耐火煉瓦、セメント、石灰、陶器類の製造

製材業

飲食物業――菓子、パン、清凉飲料類の製造、煙草、砂糖の製造

製粉精米業

釀造業――清酒、高粱酒、味噌醬油等の釀造

印刷業――一般印刷、新聞發行、帳簿製造等

靴鞄製造業

雜業――柳行李の製造、洋服の仕立等

七、本編の記述に當つて最も遺憾であり、又最も物足りなかつた事は、朝鮮、日本、支那各地等に於ける正確な比較材料を有つて居なかつた事である。將來此の如き資料の蒐集に努めたい考へであるが、何人かによつて速に調査されることを希望して止まない。

八、本編の刊行は昨年末を目標とし各工場主にも其約束をしたのであるが、仕事の關係上非常に遲れ、愈々猶豫が出來なくなつて一瀉千里の勢で脫稿した。敍事の不明瞭、行文の拙劣唯御判讀を乞ふ次第である。

九、本編は一昨年刊行の『南滿洲工業事情』と密接な關係を有するものであつて、夫を參照せられんことを望む。

一〇、統計は或ものは昭和元年又或るものは同年十二月末日を標準とせる數字に依るものである。

一一、本編の筆者は課員阿部勇である。

昭和三年二月三日

庶務部調査課

續南滿洲工業事情 目次

續南滿洲工業事情

第一章　資本

在滿日本人工場の現狀は大部分小規模の經營である。回答工場百六十二に就いて見るに資本の五萬圓に滿たざるもの九十四にして約五十八％を占め、若し之に五十萬圓未滿のものを加算せんか、其數百二十三約七十六％に達する。而も有力なる工場にして回答に漏れたるもの極めて少數なるに反し、調査の行き屆かざる微力な日本人工場は尚二三百に達する見込なるが故に、之等を考慮に入れる時小規模經營の工場が占むる割合は遙に多くなるであらう。

此の如きは在滿日本人中小工業者が支那人同業者に日々壓迫せられつゝありと聞く今日甚だ心細き次第でなければならぬ。といつて勿論大工業が滿洲に於て繁榮して居るとは云はぬ否寧ろ不振の狀態に沈淪して居るのであるが然し少くとも日本が滿洲に發展する爲には對支那人との競爭に於て資本の力に依るを必要とする。一體工業といはず、凡ゆる方面に於て在滿邦人は二の競爭者を有つ。其一は對支那人の競爭であり、其二は對外國（日本をも含んで）の競爭である。故に邦人が滿州に事業をなさんとすれば此二勢力に對して自ら守るの策を講ぜねばならないのであつて容易ならぬ苦心が存在する。

次に回答工場に就ての企業形態を見るに個人工場七十六、合資並合名組織工場二十八、株式組織工場六十一であ

る。之よりすれば株式組織のもの比較的多きを以て在滿工業も相當大規模のもの存在するが如きも、既述の如くそは株式組織の名を冠するのみにして、眞に大資本を集めて經營する近代的工場は僅に指を屈するに過ぎない。

又百六十五工場の公稱資本は約七二、〇〇〇、〇〇〇圓、拂込資本は約四九、〇〇〇、〇〇〇圓にして、滿洲全體に於ける日支人の工業投資が、約二億圓に達するこいふも蓋し正確に近いであらう。

資本別工場數

業別＼資本別	一萬圓未滿	一萬圓以上五萬圓未滿	五萬圓以上一〇萬圓未滿	一〇萬圓以上五〇萬圓未滿	五〇萬圓以上一〇〇萬圓未滿	一〇〇萬圓以上二〇〇萬圓未滿	二〇〇萬圓以上五〇〇萬圓未滿	五〇〇萬圓以上	計
鐵工業	三	九	五	五	—	一	一	—	二四
染織工業	—	二	—	—	一	三	二	一	九
化學工業	—	四	—	四	二	三	二	—	一五
油坊業	—	—	一	二	二	—	一	—	六
窯業	二	八	六	四	二	四	一	—	二七
製材業	一	二	四	一	一	一	—	—	一〇
飲食業	一	五	一	—	—	二	—	一	一〇
精米業	一	五	一	二	—	一	—	一	一一
釀造業	—	三	二	七	—	四	—	—	一六
印刷業	三	九	三	三	一	—	—	—	一九
靴鞄業	二	三	—	一	—	—	—	—	六

雜業	四	三	一	｜	一	｜	｜	｜	九
計	一七	五三	二四	二九	一〇	一九	七	三	一六二

備考 (一) 一萬圓は一萬圓以上に入る、以下同じ。
(二) 會社工場は公稱資本、內地に本店を有する支工場及個人工場は其實際投資額をとつた。

企業形態別工場數

業別／形態別	株式組織工場	合資合名組織工場	個人工場	計
鐵工業	五	三	一七	二五
染織工業	七	一	一	九
化學工業	一〇	｜	五	一五
油坊業	四	一	一	六
窯業	一一	五	一一	二七
製材業	三	一	六	一〇
飲食業	四	三	四	一一
製粉業	五	二	五	一二
釀造業	六	六	四	一六
印刷業	四	四	一一	一九
靴鞄業	｜	一	五	六
雜業	二	一	六	九
計	六一	二八	七六	一六五

備考 支工場も之に算入した。

資本

事業別／資本別	公稱資本	拂込資本
鐵工業	四、一三八、〇〇〇	二、七七三、〇〇〇
染織工業	一五、五七九、〇〇〇	一〇、七五五、六二五
化學工業	一〇、〇八六、〇〇〇	六、八六六、〇〇〇
油坊業	三、九九〇、〇〇〇	三、六八〇、〇〇〇
窯業	八、五七六、五〇〇	五、五五四、七〇〇
製材業	一、九〇五、〇〇〇	一、一五五、〇〇〇
飲食物業	一三、一六八、九〇〇	一一、一五七、〇〇〇

資本別＼事業別	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	其他雜業	計
公稱資本	七、一三七、〇〇〇	五、三〇〇、〇〇〇	一、四四四、五〇〇	二四六、〇〇〇	六二四、〇〇〇	七二、一九四、九〇〇
拂込資本	三、八三七、〇〇〇	二、〇二七、五〇〇	九三六、五〇〇	二二六、〇〇〇	三七四、〇〇〇	四九、三四二、三二五

備考　油坊業の中に奉票資本のものが一あつたが、便宜上金票に換算した。
公稱資本といふも、滿洲外に本社を有するもの及個人工場は該工場に對する實際投資額とした。

第二章　會社組織工場の基礎

茲に工場の基礎といふも積立金額以外に何等の材料を有つて居ないのであつて、從て又個人工場に就いては言及することが出來ない。

第一、株式會社工場の部

拂込資本と積立金

株式組織工場に於て積立金の最も多いのは製材工業であつて拂込資本金に對する一倍半强を所有して居る、然し之は日支合辦の鴨綠江製材無限公司が百二十餘萬圓といふ變態的積立金を有することより來た現象であつて、該工場を除外する時其割合は極めて小さくなるであらう。次に來るものは雜工業の二十八％精米製粉工業の二十一％である。後者の割合の比較的に良好なるは目下整理中の滿洲製粉の積立金額を算入せる爲なれば、實際に於て之も遙に減少すべきものと思はれる。以上三者を除く時・他の諸業は何れも積立金極めて少く拂込資本に對する割合は平均四％といふ慘さである。

合名合資組織工場に至つては積立金を有するものが殆どない。勿論之等は株式組織と異つて信用を人的要素に置くものなるが故に商法にも積立金に關して規定して居ないが、苟も外國の地に於て事業を營む者が餘剩さへあれば之を他日の用に積立置くべきは理の當然にして此の如き遠慮無きことは之等邦人事業が不振にして用意の到り難きことを示すと共に、事業の基礎の確固たらざるを示すものと言つていゝであらう。

業別	拂込資本額	積立金額	拂込資本額に對する積立金の割合
鐵工業	一、九五三、〇〇〇	一三五、八〇〇	七%
染織業	六、二七六、六二五	一一九、八〇〇	二%
化學工業	六、〇八〇、〇〇〇	一八四、五〇〇	三%
油坊業	四四〇、〇〇〇	二一、一四六	五%
窯業	三、〇〇八、五〇〇	一四二、七一〇	五%
製材業	八五五、〇〇〇	一、三三〇、〇〇〇	一五六%
飲食物工業	八、八八五、〇〇〇	一二八、一七九	一%
製粉精米	三、五九七、〇〇〇	七四四、四八三	二一%
釀造業	一、七五〇、〇〇〇	三四、五四六	二%
印刷業	六〇七、〇〇〇	二〇、四〇〇	三%
靴鞄業	—	—	—
雜業	三一〇、〇〇〇	八六、九〇〇	二八%
計	三三、七四四、一二五	二、九二八、四六三	九%

備考　滿洲外に本社を有し在滿工場自身に關する積立金の不明なるものは此の計算より除いた。

第二、合資及合名會社の部

業別	拂込資本額	積立金額	拂込資本額に對する積立金の割合
鐵工業	一九、〇〇〇	—	—
染織工業	三二、〇〇〇	—	—
化學工業	—	—	—
油坊業	九〇、〇〇〇	—	—
窯業	二五五、二〇〇	二五、八五三	一〇%
製材業	五〇、〇〇〇	九、八七五	二〇%
飲食物業	二八、〇六八	八七四	三%
製粉精米業	五五、〇〇〇	四、三〇五	八%
釀造業	三三七、五〇〇	一四、〇五三	四%
印刷業	四三、〇〇〇	—	—
靴鞄製造業	一〇、〇〇〇	—	—
其他雜業	五、〇〇〇	—	—
計	九一五、七六八	五四、九五九	六%

備考　此種の工場には本社を滿洲以外に置くものはなかつた。

第三章　生產と事業成績

回答工場の生產能力は製品を時價に換算して一一五、二八八、〇三〇圓であるが、昭和元年中に於ける實際生產高は五三、〇一〇、一六三圓にして生產能力に對する四十六％の仕事をなしたに過ぎない。最も多く製造に從事せるは印刷業（能力に對する割合七十八％）にして窯業の六十九％、靴鞄業の六十七％、鐵工業の六十四％之に次ぎ、染織業（五十七％）釀造業（五十七％）は約二分の一の生產に留つた。製粉精米業（二十％）油坊業（三十四％）雜業（三十八％）の如きは最も閑散なりし事業に屬する。

昭和元年度に於て在滿邦人工場は利益したか。先づ其數より見る。回答工場百六十二中利益せること明白なるものは八十四で總數の約二分の一に過ぎないが、然し一方損失明かなるもの僅に二十九といふ少數なるを以て相當良き成績を擧げたといふことが出來るかも知れない。唯玆に注意すべきは、損益不明なる工場が多數存することであつて、之が四十九總數の約三分の一に該當する爲、其內狀を明にする時前記損益工場の分野に大なる變化を齎らすであらう。勿論かゝる場合と雖も、必ずしも損失工場が多くなるとは限らないが、然し個人經營並に合資合名組織の工場に於て損益不明の工場が多いことは支那人中小工業に脅威を感じつゝある現在に於て寒心に堪へないものがある。又之等工場の中利益せるものも其額を明記せず、年何割位の利益ありなどと曖昧なる推算が頗る多かつたことは在滿邦人工業に就いて常に疑惑の目を以て見つゝある吾人にとり都合良き材料を提出しなかつた。

工場の種類	總數	利益工場	總數に對する割合	損失工場	總數に對する割合	損益不明工場	總數に對する割合
株式組織工場	五八	三二	五五%	一六	二八%	一〇	一七%
合資合名組織工場	二八	一五	五四%	四	一四%	九	三二%
個人經營工場	七六	三七	四九%	九	一二%	三〇	三九%
計	一六二	八四	五二%	二九	一八%	四九	三一%

次は損益の實の方面である。三十二の利益せる株式組織工場中配當せるものは十四にして總數の二分の一以下である。之は論ずる迄もなく大部分過去に於ける損失塡補に向けられたるか、又は後述の如く益金額僅少にして配當するに足らざるかの事實に因ること明かである。合名並に合資組織工場に於ては配當せる工場數が遙に少い。利益工場數十五に對する二の割合である、之等工場は規模に經營に個人工場と殆ど變りなきもの多く、收支計算の如きも明確に爲されて居るのが少き爲、配當を殊更に回答せざりしやも知れないのであるが、唯過去に於ける在滿工業の狀態に顧て株式組織工場と同一原因に依るものと推するの妥當なるべきを思ふ。個人工場に至りては利益は直ちに經營者の利用に任せらるゝものなれば玆に言ふべき限りでない。

工場種類	利益工場數	配當せる工場數
株式組織工場	三二	一四
合名合資組織工場	一五	二
計	四七	一六

尙質の問題に於て然らば實際幾何の損益があつたか。株式組織工場全體として見る時は

利益總額	九〇三、二二二圓
損失總額	二、二〇一、七三〇圓
差引損失額	一、二九八、五〇八圓

となつて居る。然し事業種類別にすれば損失せるものは

染織工業の差引損失	一、二三五、七七五圓
化學工業の差引損失	八、二七一圓
油房工業の差引損失	六一、七三六圓
飲食物工業の差引損失	四五三、九三七圓
計	二、二〇一、七三〇圓

の四にして他の七工業は多少の利益を擧げることが出來たのであつて、唯之等四工業中の大規模工場が莫大なる損失を招きたる爲前記の差引損失となつたのである。利益せる七工業の利益額は次の如し。

鐵工業の差引利益	六九、〇九二圓
窯業の差引利益	一二六、九四〇圓
製材工業の差引利益	一三四、三六三圓
製粉精米工業の差引利益	三一、九六二圓

釀造工業の差引利益	五七、四〇一圓
印刷業の差引利益	一、六八二圓
雜工業の差引利益	三九、七七一圓
計	九〇三、二二二圓

此損益の拂込資本に對する比率を求むれば全體として四％の損失となり、事業別として（△は損失）

鐵工業	三％	染織工業	△一五％
化學工業	△一四％	油房工業	△一四％
窯業	四％	製材工業	一六％
飲食物工業	△五％	製粉精米工業	一〇％
釀造工業	三％	印刷業	五％
雜工業	一三％		

となる、染織、化學、飲食物等は拂込資本合計二千二百圓に達し他事業のそれの約二倍に上るが故に、之等の損失比率が利益比率と同樣一割內外とするも金額に於て前者が遙に大なるは直に首肯し得る所であらう。

合名並に合資組織工場は如何。何れも尙可成の成績である。差引損失せる事業一つもなく、全體としての利益は九四、六三二圓にして拂込資本七〇一、七六八圓に對する割合は十三％である。

個人經營の事業も亦損失せるものはないが、利益率は合名合資組織のものより遙に少く、約二分の一即ち六％內

外である。

斯くて合名合資組織並に個人經營工場が多かれ少かれ利益せることは、吾人の意を强うして餘りあるのであるが、其記入に於て果して此の如き好成績を實際收め得たか何うかを疑はしむるやうな記入の點在せるのが甚だ遺憾に堪へないことを附け加へて置く。それが吾人の色眼鏡であるならば幸此上もない。

更に各企業形態全部を合した損益は如何といふに株式組織工場の損失莫大なりし爲、他の工場の利益も之を補塡すること能はず、結局次の如き損失となつて居る。

損益明かなる工場全體の拂込資本金		三四、九七四、一四三圓
同	利益金	一、一六〇、一六九
同	損失金	二、二一六、一七六
同	差引損失	一、〇五六、〇〇七
拂込資本に對する損失の割合		三%

最後に利益せる各種工場（個人工場を除く）は如何なる配當をなしたか。事業別に就いては後表の參照を乞ふとして、玆には單に全體としての配當率を掲げ、尙それは合名合資組織の一工場が年一割五分の配當をなせる他、何れも一割に達するもの丶なかつたことを附言して置くに留める。

	株式組織工場	合名合資組織工場
配當せる工場の拂込資本	四、〇四五、〇〇〇円	一〇五、〇〇〇円
同　配當金	三〇四、一二五	七、三五〇
拂込資本に對する配當金の割合	年八%	年七%

損益明かなる各種事業の數

（A） 株式組織工場の部

損益＼業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄業	雜業	計
利益せる工場數	二	二	四	×一	八	三	一	二	五	二	—	二	三二
損失せる工場數	二	四	四	一	一	—	一	一	一	一	—	—	一六
損益不明なる工場數	—	一	二	二	二	—	一	一	—	一	—	—	一〇
計	四	七	一〇	四	一一	三	三	四	六	四	—	二	五八

備考　本社を滿洲外に置き在滿工場それ自身の損益不明なるものは損益不明なる工場の中に入れた。
上下二期に分れ居るものに就いては、二期の損益を加減し、差引殘が利益であれば利益の部に、損失であれば損失の部に入れた。
×印　上半期の不明なる工場があつたのでそれは下期の成績のみを以てした。

(B) 合資合名組織工場の部

業別／損益	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄業	雜業	計
利益せる工場數	一	—	—	一	三	一	二	二	三	一	—	一	一五
損失せる工場數	一	—	—	—	一	—	—	—	一	—	一	—	四
損益不明なる工場數	一	一	—	—	一	—	一	—	二	三	—	—	九
計	三	一	—	一	五	一	三	二	六	四	一	一	二八

(C) 個人工場の部

業別／損益	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄業	雜業	計
利益せる工場數	八	一	二	一	七	二	三	二	一	四	三	三	三七
損失せる工場數	三	—	一	—	一	一	—	—	一	一	一	—	九
損益不明なる工場數	六	—	二	—	三	三	一	三	二	六	一	三	三〇
計	一七	一	五	一	一一	六	四	五	四	一一	五	六	七六

利益せる工場と配當せる工場との數

(A) 株式會社の部

業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄業	雜業	計
利益せる工場數	二	二	四	一	八	三	一	二	五	二	｜	二	三二
利益配當をなせる工場數	一	一	二	｜	三	一	一	一	一	一	｜	二	一四

（B）合資合名會社の部

業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄業	雜業	計
利益せる工場數	一	｜	｜	一	三	一	二	二	三	一	｜	一	一五
利益配當をなせる工場數	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一	一	｜	｜	｜	二

各種事業の損益

（A）株式會社の部

業別／損益	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業
損益明かなる工場の拂込資本	一、九三五、〇〇〇	八、二〇三、四八二	五、八五〇、〇〇〇	×四四〇、〇〇〇	二、八八三、五〇〇	八五五、〇〇〇	八、八八五、〇〇〇
其純益	一七〇、九六三	六八、四五六	一四七、七八四	二一、七〇八	一四七、八七七	一三四、三六三	五四、九六二
其純損	一〇一、八七一	一、三〇四、二三一	一五六、〇五五	八三、四四四	二〇、九三七	｜	五〇八、八九九
差引損益	六九、〇九二	△一、二三五、七七五	△八、二七一	△六一、七三六	一二六、九四〇	一三四、三六三	△四五三、九三七

拂込資本に對する利益（又は損△印）の割合	三%	△一五%	△〇・二四%	△一四%	四%	一六%	△五%

業別 / 損益	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄業	雜業	計
損益明かなる工場の拂込資本	三二〇、〇〇〇	一、八五〇、〇〇〇	三九七、〇〇〇	―	三〇〇、〇〇〇	三、八九〇、九八三
其純益	五〇、九六三	六一、七七三	四、六〇三	―	三九、七七一	九〇三、二二二
其純損	一九、〇〇〇	四、三七二	二、九二一	―	―	二、二〇一、七三〇
差引損益	三一、九六三	五七、四〇一	一、六八二	―	三九、七七一	△一、二九八、五〇八
拂込資本に對する利益（又は損△印）の割合	一〇%	三%	〇・五%	―	一三%	△四%

備考 ×印上半期の損益不明の一工場があつたので、下半期のみをとつた。

（B）合資合名會社の部

業別 / 損益	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄業	雜業	計
損益明かなる工場の拂込資本	一五、〇〇〇	―	―	九〇、〇〇〇	×一八二、二〇〇	五〇、〇〇〇	一七、〇六八	五五、〇〇〇	二六七、五〇〇	二〇、〇〇〇	×―	五、〇〇〇	七〇一、七六八
其純益	二、〇〇〇	―	―	三四、一五九	二〇、一七八	三、一〇〇	三、二〇二	二、四八二	二七、二七〇	三、五〇〇	―	一八七	九六、〇七八
其純損	一九六	―	―	―	―	―	―	―	一、二五〇	―	―	―	一、四四六
差引損益	一、八〇四	―	―	三四、一五九	二〇、一七八	三、一〇〇	三、二〇二	二、四八二	二六、〇二〇	三、五〇〇	―	一八七	九四、六三二
拂込資本に對する利益（又は損△印）の割合	一二%	―	―	三八%	一一%	六%	一八%	五%	一〇%	一八%	―	四%	一三%

備考 ×印の各業に於て損失せること明かなれど額不明のものが二三あつた。而して拂込資本中には之等工場をも含み居るが故に、實際の利益率は表中のものより更に小さなる筈である。

（C）個人工場の部

損益＼業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業
損益明かなる工場の投資額	(一) 六二九,〇〇〇	二〇,〇〇〇	二八,〇〇〇	四五〇,〇〇〇	(二) 二二六,五〇〇	一二五,〇〇〇	一三二,八九三
其純益	三〇,六二〇	三,八〇〇	七,五〇〇	一四,三九八	一三,八四二	三五,〇〇〇	一六,三〇〇
其純損	一,五〇〇	—	一,五〇〇	—	—	—	—
差引損益	二九,一二〇	三,八〇〇	六,〇〇〇	一四,三九八	一三,八四二	三五,〇〇〇	一六,三〇〇
投資に對する利益（又は損△印）の割合	五%	一九%	三%	三%	六%	二八%	一二%

損益＼業別	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄業	雜業	計
損益明かなる工場の投資額	四五,〇〇〇	三五,〇〇〇	(三) 一〇七,〇〇〇	(四) 一八六,〇〇〇	二八,〇〇〇	二,三八一,三九三
其純益	一二,〇〇〇	一〇,〇〇〇	五,九〇〇	七,三〇〇	四,二〇〇	一六〇,八六九
其純損	—	一〇,〇〇〇	—	—	—	一三,〇〇〇
差引損益	一二,〇〇〇	—	五,九〇〇	七,三〇〇	四,二〇〇	一四七,八六九
投資に對する利益（又は損△印）の割合	二七%	二%	六%	四%	一五%	六%

備考（一）損失せること明かなれど額不明の工場二あり。（二）（三）（四）損失せること明かなれど額不明の工場各一あり
而して拂込資本及利益率に就いてはB表と同じ。

（D）各種企業形態工場全體の損益

業別＼損益	損益明かなる各種工場の拂込資本	其純益	其純損	差引損益	拂込資本に對する利益(又は損△印)の割合
鐵工業	二、五七九、〇〇〇	二〇三、五九三	一〇三、五六七	一〇〇、〇二六	四%
染織工業	八、三三三、四八二	七二、二五六	一、三〇四、二三一	一、二三一、九七五	△一五%
化學工業	六、〇六八、〇〇〇	一五五、二八四	一五七、五五五	△二、二七一	〇・〇四%
油坊業	九八〇、〇〇〇	七〇、二六五	八三、四四四	△一三、一七九	一%
窯業	三、二八三、二〇〇	一八一、八九六	二〇、九三七	一六〇、九五九	五%
製材業	一、〇四〇、〇〇〇	一七二、四六三	—	一七二、四六三	一七%
飲食物業	九、〇五三、九六一	七四、四六四	五〇八、八九九	△四三四、四三五	五%

業別＼損益	損益明かなる各種工場の拂込資本	其純益	其純損	差引損益	拂込資本に對する利益(又は損△印)の割合
製粉精米業	四三三、〇〇〇	六五、四四四	一九、〇〇〇	四六、四四四	一一%
釀造業	二、三四二、五〇〇	九九、〇四四	一五、六二三	八三、四二一	四%
印刷業	四八四、〇〇〇	一四、〇〇三	二、九二一	一一、〇八二	二%
靴鞄業	一八六、〇〇〇	七、三〇〇	—	七、三〇〇	四%
雜業	三四三、〇〇〇	四四、一五八	—	四四、一五八	一三%
計	三四、九七四、四三三	一、一六〇、一六九	二、二一六、一七六	△一、〇五六、〇〇七	△三%

配當表

(A) 株式會社の部

業別	配當せる會社の拂込資本	其配當金	拂込資本に對する配當金の割合
鐵工業	七五〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	八%
染織工業	三五〇、〇〇〇	二四、五〇〇	七%
化學工業	八〇〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇	九%
油坊業	—	—	—
窯業	六五〇、〇〇〇	四五、〇〇〇	七%
製材業	二五〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	八%
飲食物業	三八五、〇〇〇	三六、五七五	一〇%
製粉精米業	二九〇、〇〇〇	一三、八〇〇	五%
釀造業	二五〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	四%
印刷業	五〇、〇〇〇	二、二五〇	五%
靴鞄業	—	—	—
雜業	三二〇、〇〇〇	二三、〇〇〇	七%
計	四、〇四五、〇〇〇	三〇四、一二五	八%

備考　上下期に分れ、各半期互に損益せるものに就いては、差引缺損の大なるものを此計算より除いた。

（B）合資合名會社の部

業別	配當せる會社の拂込資本	其配當金	拂込資本に對する配當金の割合
鐵工業	—	—	—
染織工業	—	—	—
化學工業	—	—	—
油坊業	—	—	—
窯業	—	—	—
製材業	—	—	—
飲食物業	—	—	—
製粉精米業	五、〇〇〇	七五〇	一五%
釀造業	一〇〇、〇〇〇	六、六〇〇	七%
印刷業	—	—	—
靴鞄業	—	—	—
雜業	—	—	—
計	一〇五、〇〇〇	七、三五〇	七%

第四章　原　料

常に論ずる如く、日本といふ工業先進國と間近に接し、而も輸入關税の極めて低き滿洲に於ては、滿洲土産の農林作物をとつて直に原料とするにあらざれば、他に頗る有利な條件の存せざる限り、工業經營は極めて困難である。左表にも見る如く、全體としては原料全需要額の五六十%は滿洲産であるが、其内譯に入るならば油房・窯業、製材、製粉精米、釀造を除く他の事業は何れも原料の過半を外國に仰いで居る。事業主より原料蒐集難を屢々聞くは誠に當然である。

昭和元年使用原料高

産地別＼業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業
滿洲産	二六六、八四三円	一、六三七、一六一	七六五、九二三	八、四五九、〇〇〇	三三九、〇四七	三、二四七、一四〇	二五〇、五三一
總需要高に對する滿洲産原料の割合	一九%	一八	三九	一〇〇	七〇	一〇〇	一一
支那産	八、二二八円	一、八八一、四九三	一六五、一三〇	—	二、〇二五	—	三六六、九三七
總需要高に對する支那原料の割合	一%	二〇	八	—	一	—	一五
外國産	一、一三五、三〇八円	五、七三〇、一九一	一、〇二九、九三三	—	一三九、二一〇	—	一、七四〇、六三六
總需要高に對する外國産原料の割合	八%	六二	五三	—	二九	—	七四

	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	其他雜業	計
計	一、五三〇、三七九円	九、二四八、八四五	一、九六〇、六八四	八、四九九、〇〇〇	四七〇、二七三	三、二四七、一四〇	二、三五八、一〇四

産地別＼業別	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	其他雜業	計
滿洲産	三、三二二、〇八三円	一、〇三六、〇三四	—	四九、六二〇	一五五、五六六	一九、五二八、九四七
總需要高に對する滿洲産原料の割合	九九・九%	九六	—	二一	三二	五七
支那産	—円	—	五、〇〇〇	—	—	二、四二八、八〇三
總需要高に對する支那原料の割合	—%	—	〇、二	—	—	七
外國産	一、二八〇円	四五、四七七	二、一〇五、三〇〇	一八六、〇三五	三三〇、七一〇	一三、五三四、〇七九
總需要高に對する外國産原料の割合	〇、一%	四	九九、七	七八	六八	三六
計	三、三二三、三六三	一、〇八一、五一一	二、一一〇、三〇〇	二三五、六五五	四八六、二七六	三四、四九一、八二九

第五章　石炭と電力

滿洲に於ける石炭と電力とに就いては問題が多いやうである。それだけに又、之と比較すべき正確な他地方の材料存せざれば輕々しく玆に問題とすることが出來ないのであつて現在に於ては既刊の南滿洲工業事情にて論ぜし以上に出づることも能はざるは最も遺憾とする所唯それと併讀せらるれば幸と思ふ。

滿洲に於ける撫順炭の需要者は直接滿鐵より購入するか、又は滿鐵の指定販賣人より購入するかの二途に依らねばならぬ。

大量を需要する工場は槪ね滿鐵と直取引するのであるが、其の炭價は工場の需要量及び其信用の程度如何により滿鐵の地賣公定炭價に幾分の加減の加つたものであり指定販賣人より購入する工場は公定炭價に販賣人の口錢を加へたものである。但し口錢は一噸に付一圓以下の定めあるを以て、結局直取引すると否とに關せず炭價は公定相場を標準とすると言つて宜いであらう。尙念の爲に附加へ置くべきことは滿鐵が産業助成の意味に於て月五十噸以上の使用者に噸當り五十錢の補助をなしつゝあることである。

公定貨車渡炭價（一噸ニ付）

炭種別／土地別	塊炭	切込炭	粉炭
大連	一五・五〇円	一三・五〇	一二・八〇
營口	一三・五〇	一一・五〇	一〇・八〇

鞍山、遼陽	一三・五〇	一一・五〇	一〇・八〇
奉天	一二・五〇	一〇・五〇	九・八〇
鐵嶺	一三・三〇	一一・三〇	一〇・六〇
開原	一三・六〇	一一・六〇	一〇・九〇
四平街	一四・五〇	一二・五〇	一一・八〇
長春、公主嶺	一五・五〇	一三・五〇	一二・八〇
本溪湖	一三・五〇	一一・五〇	一〇・八〇
安東	一五・五〇	一三・五〇	一二・八〇

勿論回答工場の使用石炭は全部撫順炭と限つて居る理由でないが、其九分九厘まで撫順炭と見て誤りなく、而して其平均噸當りも右公定炭價と大差がない。

即ち各業が使用する平均石炭價格は後表に讓るとして、回答工場全體の使用炭價は次の如くである。

塊炭 一五・四九円　切込 一二・三四円　粉炭 一〇・五五円

次に電力に關し既述の如く比較材料を有せないのであるが、頗る高價なりとの不平を到る處に於て聞かされて居る。一キロワット時につき最高平均六錢六厘、最低平均四錢二厘、全體の平均五錢二厘は一見しても低廉ならずと思はれるやうである。最も電力の安價なるは撫順にして、大連等は普通、其他沿線は高價、殊に中間附屬地に於て驚くべき程高いのを見る。

回答工場百六十五の一ヶ年使用電力料金は七十五萬七千圓弱にして電力の使用が案外少い。之は大規模工場が少いこと、而もそれ等大工場の中には事業不振の爲作業を一杯に行つて居ないものがあること、電力が高價なる爲に石炭を使用して居るものがあること等に依るものゝ如くである。

尙附表に電動機の馬力別を示したのは電力料金が電動機の大小によつて非常に高低があること、而して滿洲の工場の多くは小電動機を使用して居ること等を示す積りなのである。

昭和元年使用燃料表

業別	塊炭 數量	塊炭 價格	塊炭 平均價格	切込 數量	切込 價格	切込 平均價格	粉炭 數量	粉炭 價格
鐵工業	三、四三八噸	五四、八一七円	一五・九四円	七四二噸	二、九一九円	一六・〇六円	六〇一噸	九、四〇八円
染織工業	四二五	六、三五八	一四・九六	八、一二三	八七、八一二	一〇・八〇	四、九六二	五一、七三三
化學工業	二八、六四九	四四二、〇九七	一五・四三	五、五七〇	八五、三三八	一五・三二	一、六三四	二一、一九六
油坊業	—	—	—	九、五八一	一二四、八五一	一三・〇三	四、九七九	四八、五三二
窯業	一一、三五五	一七六、八一七	一五・五七	三、六四六	四二、〇二四	一一・五三	六六、五八三	七一一、七三九
製材業	—	—	—	—	—	—	—	—
飲食物業	三七〇	五、八三九	一五・七七	一、五〇七	一七、八〇九	一一・八二	九、四四七	八七、四八一
製粉精米業	五二八	七、九二〇	一五・〇〇	七九二	一〇、六九二	一三・五〇	—	—
釀造業	九七九	一四、七二四	一五・二〇	三、六六六	三四、五一七	九・四二	九六二	一〇、五八二
印刷業	—	—	—	—	—	—	—	—
靴鞄製造業	—	—	—	—	—	—	—	—
其他雜業	一〇〇	一、五七〇	一五・七〇	—	—	—	—	—
計又ハ平均	四五、八四〇	七二〇、一三八	一五・四九	三三、六三七	四一四、九五二	一二・三四	八九、一六八	九四〇、六六〇

	平均價格	一五・六五円	一〇・四三	一二・九七	九・七五	一〇・六九	—	九・二六	—	一一・〇〇	—	—	—	一〇・五五
二號切込又は二號切込さ推せらるゝもの	數量	—噸	一、二五七	三、四八五	—	三、四六八	—	—	—	—	—	—	—	一七、二一〇
	價格	—円	九、三五六	二六、〇五八	—	七九、〇三一	—	—	—	—	—	—	—	一二六、四四五
	平均價格	—円	七・四四	八・〇五	—	六・三四	—	—	—	—	—	—	—	六・七七
以上計	數量	四、七八一噸	一四、七七七	三九、三三八	一四、五六〇	九四、〇五二	—	一一、三三四	一、三三〇	五、六〇三	—	—	一〇〇	一八五、八五五
	價格	七六、一四四円	一五五、二五九	五七六、六七九	一七三、三七三	一、〇〇九、六一一	—	一一一、一二五	一八、六一三	五九、八二三	—	—	一、五七〇	二、一八二、一九五
コークス（瓦斯コークスを含む）	數量	二、八六五噸	—	一六二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三、〇二七
	價格	六四、〇六五円	—	四、五四三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	六八、六〇八
	平均價格	二二・三六円	—	二八・〇四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二二・六七
瓦斯	價格	—円	二、八一二	一三一、三九〇	六〇二	—	—	二、五六八	—	—	—	—	一、〇一二	一三八、三八三
薪炭其他	價格	四六、五八五円	三二五	二四〇	二、五〇二	七、三三一	—	六、三八六	八、一〇七	—	五、九三九	—	—	七七、四〇五
以上價格總計		一八六、七九四円	一五八、三九六	七一二、八五二	一七六、四七六	一、〇一六、九三三	—	一二〇、〇七九	二六、七二九	五九、八二三	五、九三九	—	二、五八一	二、四六六、五九一

昭和元年使用

電力料金

事業別	昨年電力料金	一キロワット時最高料金	一キロワット時最低料金	一キロワット時平均料金
鐵工業	七〇、八〇五円	七・五錢	三・〇錢	五・二錢
染織工業	四〇一、三六二	四・九	三・四	四・二
化學工業	五六、七三四	五・一	三・一	四・八
油坊業	七三、六三二	四・五	三・八	四・二
窯業	五〇、三〇四	六・五	三・五	五・〇
製材業	三〇、六四九	五・一	四・八	四・九
飲食物業	三三、九七三	六・〇	三・三	四・七
製粉精米業	三一、七三五	七・〇	三・五	五・六
釀造業	三、九五一	一〇・〇	七・〇	八・五
印刷業	三、〇四一	七・〇	六・〇	六・五
靴鞄製造業	—	—	—	—
其他雜業	二、三七三	—	—	三・五
總計（又は平均）	七五六、八〇一	平均 六・四	平均 四・一	平均 五・二

電動機數

事業別／馬力別	半馬力以上十馬力未滿	十馬力以上三十馬力未滿	三十馬力以上五十馬力未滿	五十馬力以上百馬力未滿	百馬力以上三百馬力未滿	三百馬力以上六百馬力未滿
鐵工業	五一	四八	四	四	二	—
染織工業	四五	一九	一六	一七	一二	—
化學工業	九五	二四	五	—	—	—
油坊業	一一	五	三	二	三	—
窯業	五〇	一六	一四	一三	四	二
製材業	八	六	五	四	一	—
飲食物業	四九	三六	九	四	—	—
製粉精米業	五	八	—	—	—	一
釀造業	九	三	—	—	—	—
印刷業	三九	一	—	—	—	—
靴鞄製造業	—	—	—	—	—	—
其他雜業	七	—	一	—	—	—
計	三六九	一六六	五七	四四	二二	三

南滿洲電氣株式會社電力料金表

一、大　連

電動機容量別	約束電力一馬力當平均一ヶ月間の使用電力量 百「キロワツト」時迄の料金一「キロワツト」時に付き	百「キロワツト」時超過二百「キロワツト」時迄の料金一「キロワツト」時に付き	二百「キロワツト」時超過三百「キロワツト」時迄の料金一「キロワツト」時に付き	三百「キロワツト」時超過の料金一「キロワツト」時に付き
半馬力以上十馬力未滿	金六錢五厘	金五錢	金四錢	金三錢五厘
十馬力以上三十馬力未滿	金六錢	金四錢六厘	金三錢七厘	金三錢二厘
三十馬力以上五十馬力未滿	金五錢五厘	金四錢二厘	金三錢四厘	金三錢
五十馬力以上百馬力未滿	金五錢一厘	金三錢九厘	金三錢一厘	金二錢七厘
百馬力以上三百馬力未滿	金四錢八厘	金三錢七厘	金三錢	金二錢六厘
三百馬力以上六百馬力未滿	金四錢五厘	金三錢五厘	金二錢八厘	金二錢五厘

二、奉天、長春、安東の分

電動機容量別	約束電力一馬力當平均一ヶ月間ノ使用電力量			
	百「キロワット」時迄の料金一「キロワット」時に付き	百「キロワット」時超過二百「キロワット」時迄の料金一「キロワット」時に付き	二百「キロワット」時超過三百「キロワット」時迄の料金一「キロワット」時に付き	三百「キロワット」時超過の料金一「キロワット」時に付き
半馬力以上十馬力未滿	金七錢	金五錢五厘	金四錢五厘	金四錢
十馬力以上三十馬力未滿	金六錢五厘	金五錢一厘	金四錢二厘	金三錢七厘
三十馬力以上五十馬力未滿	金六錢	金四錢七厘	金三錢八厘	金三錢四厘
五十馬力以上百馬力未滿	金五錢六厘	金四錢四厘	金三錢六厘	金三錢二厘
百馬力以上三百馬力未滿	金五錢一厘	金四錢	金三錢三厘	金二錢九厘
三百馬力以上六百馬力未滿	金四錢八厘	金三錢八厘	金三錢一厘	金二錢八厘

第六章　勞力

勞力に就いて最も重大なる問題となるのは賃銀と能率との二である。前者に關しては相當の材料あれど、後者即ち滿洲勞働者の能率如何及び如何にせば能率を擧げ得るかといふ事に至つては未だ少しも研究されて居ない。勿論回答工場が一二の例外を除き以下述ぶる所の種々の事項を考慮せる結局に於て滿洲勞働者の使用が利益であることを主張して居ることより見れば、或は斯る研究は必要ない事かも知れないが、然しそれは過去に於て云はれ得た事實であつて、生産品販賣の競爭が益々激烈ならんとする將來に互り許さるべき主張ではないであらう。況や在滿邦人工業が萎靡して振はず、企業家が一日も速に生産要素に就いて適確なる概念を有たざるべからざる今日に於てをやである。とはいへ我に又前著にて述べし以上の材料があるのではない。故に玆に於ては暫く各種事業家の通說即ち華人勞働者の能率は普通內地勞働者の六、七割に當るといふことに留め置き、以下數種の項目に關し、知り得たことを述ぶるであらう。

（一）　勞働者の募集と其出身地

募集は極めて容易である。然し其出身地が、山東方面を主とし、之に次ぐに工場附近の農村を以てするが故に、無學間なく、訓練なく、技術なく、熟練を要する工業に於ては其養成に頗る苦心する。而かも勞働者の移動することの多い事業、殊に染織方面の工場は養成費を損失すること莫大なるもの、やうである。彼等の出身地が斯の如きは反面に於て從順、忍耐、勞銀低廉等を意味するものにして、熟練を必要とせず、從つて又移動に重を置かざ

る事業例へば油房、窯業等は頗る利便を受けつゝある。

（二）長所と短所

之は如何なる處に於ても常に云はれる處であるが玆に特に強調したい一事がある。それは非常に多くの工場が言語不通を以て彼等の短所としたことである。言語不通の如きは却て他國に企業する者自身の缺點短所と考へられて然るべきに、此聲を耳にするは在滿日本人工場主の心意氣、延いては在滿日本人の生活態度を不用意の間にひよつこり出した面白味と、實際第一線に立つて働かんとするものは是非其地の國語に通ずべきであるといふ教訓を物語つて居るであらう。少くとも直接勞働者と共に工場に作業し、指導監督する日本人は華語に精通せることを必須の條件とせねばなるまい。

勞働者の長所として列擧さるべきは

（イ）筋肉勞働に適し單調なる連續的反覆作業に良し。

（ロ）勤勉にして忍耐力あり、且從順である。

（ハ）賃銀低廉。

勞働者の短所として列擧さるべきは

（イ）責任感念乏しく怠惰なり。規律を缺く。

（ロ）愚鈍にして氣轉利かず

（ハ）仕事を爲すに總て受身にして嚴重なる指揮監督を要す。

（ニ） 無智にして多分の雷同性並に盜癖を有す

（ハ） 言語不通にして雇主との意志疎通を缺く。

（三） 移動並に出勤狀態

移動は募集の項に述べたるが如く重大な問題である。移動多き時は獨り職工養成費の損失となるのみでなく、能率を非常に低下せしむるからである。回答工場に於ける勞動者の昭和元年中に入れ代つた割合は各工場使用全數に對して平均一〇乃至二〇%見當であるが、鐵工、染織、化學、油房、窯業、精米の諸工業に於てはそれが頗る大きい。勿論之等の中には鐵工、染織、化學工業の如く移動によつて重大なる影響を受けるものと、油房・窯業、精米工業の如く差して苦痛を感ぜざるものと存するが故に、移動率が同一なりとも、同じ樣に論ぜらるべきでない。次に掲ぐる數字も極めて不完全なるものではあるが、移動の趨勢を知る上に於ける何等かの手掛として置く。之に依れば移動の甚しき工場數は三十にして回答工場總數の約五分の一に當り、殆ど移動のなき工場は五十六にして約三分の一に相當して居る。

勞働者移動の趨勢

事業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	其他雜業	計
殆ど移動なき工場數	四	二	六	一	一〇	四	六	五	八	四	二	四	五六
移動の激しき工場數	六	五	三	二	三	一	一	三	三	二	一	一	三〇

其他移動ありし工場數	一二	二	五	三	八	四	二	一	二	三	一	三	四六
移動について記入なかりし工場數	三	一	一	一	六	一	二	三	三	一〇	二	一	三三
計	二五	九	一五	六	二七	一〇	一二	一二	一六	一九	六	九	一六五

備考 ※移動甚しき工場數の中には移動率三〇%以上のもの、及び移動率に就いては明記なきも「移動甚し」と記入せるものを入れた。

移動率別工場數

事業別／移動率	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	其他雜業	計
〇%工場數	四	二	六	一	一〇	四	六	五	八	四	二	四	五六
一〇%未滿工場數	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
一〇%以上三〇%未滿工場數	八	二	五	三	七	三	二	一	二	三	一	三	四〇
三〇%以上五〇%未滿工場數	四	一	一	一	一	一	一	二	一	二	一	一	一五
五〇%以上七〇%未滿工場數	二	四	二	二	二	一	一	一	二	一	一	一	一五
八〇%以上工場數	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

備考 (一) 玆に移動とは平均勞働者需要數に對する一ヶ年の入れ代つた數の割合である。

(二) 「移動甚し」とのみ記入せるものが、染織工業及窯業に各一づつあつたが、整表の關係上獨斷にて五〇%以上の部に入れた。

次に出勤狀態であるが百六十五工場中、不良なりと回答せるもの僅に九工場に過ぎざれば、概して良好なりといふことが出來やう。唯次の二つの場合には缺勤者多きことを附記せる工場が六許りあつた。

（イ）農繁期に於て

（ロ）雨天の際

（四）結局に於て支那人勞働者の使用は利益なりや否や。

利益なりと明答せるもの七十五工場、左程利益ならずとせるもの三工場、不利なりと斷定せるもの六工場にして記入なきもの八十一工場であつた。之より推察すれば支那人勞働者の使用は工場にとつて利益なりと言つて差支なかるべく、それは勞銀の頗る低廉なることに根本原因を有つて居る。

唯茲に注意すべきは、利益に關する結局の考察に於て染織、化學の兩工業に、明答を避けた工場の頗る多かつたことである。技術敎育、團體訓練、分業等を高度に要求し、且つ大規模經營の工場多い事業だけに、明答のなかつた事は支那人勞働者に一抹の暗影を伴ふやうな氣がする。

支那人使用の利便に就いて

事業別	利益なりとせる工場數	左程利益ならずとせる工場數
鐵工業	一二	—
染織工業	三	—
化學工業	五	—
油坊業	二	—
窯業	一二	一
製材業	七	—
飲食物業	六	—
製粉精米業	六	一
釀造業	一一	—
印刷業	六	—
靴鞄製造業	一	—
其他雜業	四	一
計	七五	三

不利なりとせる工場數	一	｜	｜	｜	三	｜	｜	一	｜	｜	一	｜	六
明答なき工場數	一二	六	一〇	四	一一	三	五	四	五	一三	四	四	八一
計	二五	九	一五	六	二七	一〇	一一	一二	一六	一九	六	九	一六五

（五）支那人勞働者の賃銀

沿線工場中には賃銀を奉票にて支拂ふ困難を無くする爲、日本貨に代えたものもあつたが、尙奉天票を以て支拂ふ工場も相當あつた。然し調査用紙には特に何年何月に於けると明記しなかつた爲（昭和元年十二月末の積りであつた）記入區々にして、最近の如く奉天票の騰落極めて烈しい場合には、統一せる奉天票の賃銀を算出することが出來なかつたので之等は一昨年の調査に基き或は記入額より何時頃のものなりやを推算して日本貨に改めたことを遺憾とする。結果は前調査と殆ど變りがない。試に比較するならば次の如くである。但し本調査は前調査より事業別を多くせる關係上、比較の出來ないもの又は比較が出來ても大別事業中に含む實際の小別事業の出入若干あるを免れない。

支那人男工平均賃銀比較（單位錢）

	鐵工業		染織工業		化學工業		窯業		製材業		飲食物業		雜業	
	日貨	小洋銀	日貨	小洋銀	日貨	小洋銀	日貨	小洋銀	日貨	小洋銀	日貨	小洋銀	日貨	小洋銀
本調査	九三	一三八	四八	四四	七四	五六	六六	六五	七五	七八	六〇	｜	八五	｜

前調査	九六	一二四	五一	四六	六九	五三	五四	六二	八二	七〇	五四	五二	一〇五	—
前調査との比較	三錢安	一四錢高	三錢安	二錢安	五錢高	三錢高	一二錢高	三錢高	七錢安	八錢高	六錢高	—	二〇錢安	—

本調査に表はれたる百六十五工場の支那人平均賃銀は

男工	日本貨	六四錢	
	小洋銀	七二錢	
女工	日本貨	二八錢	
	小洋銀	三〇錢	

にして頗る低廉である。

事業中男工の平均賃銀の最も高きは靴鞄製造業、鐵工業、雜業、製材業、化學工業等にして、日本貨に於て一圓八十一錢乃至七十四錢の間に居り、平均賃銀の最も低きは日本貨の五十錢にして油坊、釀造に從事する者のそれが之に當る。

男工最高賃銀の平均一圓以上の事業は（日本貨にて）

靴鞄製造業	二圓三十四錢	鐵工業	一圓八十八錢
製材業	一圓五十三錢	印刷業	一圓五十二錢
雜業	一圓四十九錢	化學工業	一圓四十四錢
飲食物業	一圓十三錢	窯業	一圓〇七錢
染織工業	一圓〇四錢		

男工最低賃銀の平均四十錢以下の事業は（日本貨にて）

染織工業　二十八錢　印刷業　二十八錢

飲食物業　三十七錢　釀造業　三十七錢

の順である。

女工の各業を通じての平均最高賃銀は（日貨にて）

飲食物業　六十錢　雜業　四十一錢

平均最低賃銀は（日貨にて）

飲食物業　十六錢　染織　十九錢　製粉精米業　十九錢

の順に居り、其他は最高最低共に三十錢程度である。

支那人勞働者の賃銀額

事業別	支那男 金票 最高	支那男 金票 最低	支那男 金票 平均	支那男 小 最高
鐵工業	一・八八	〇・四六	〇・九三	二・二五
染織工業	一・〇四	〇・二八	〇・四八	一・四八
化學工業	一四・四	〇・四六	〇・七四	〇・九五
油坊業	〇・八九	〇・四二	〇・五〇	一・二六
窯業	一・〇七	〇・四八	〇・六六	一・三二
製材業	一・五三	〇・五〇	〇・七五	一・五〇
飲食物業	一・一三	〇・三七	〇・六〇	—
製粉精米業	〇・八五	〇・四	〇・五八	△ —
釀造業	〇・七二	〇・三七	〇・五〇	〇・九三
印刷業	×一・五二	〇・二八	〇・六八	—
靴鞄製造業	×二・三四	一・〇四	一・八二	—
雜業	一・四九	〇・五二	〇・八五	—
平均	一・二二	〇・四〇	〇・六四	一・三七

那 人														
洋錢	最低	〇・五五	〇・二九	〇・四七	〇・五〇	〇・四四	〇・五五	—	—	〇・四七	—	—	—	〇・四七
	平均	一・三八	〇・四四	〇・五六	〇・七一	〇・六五	〇・七八	—	〇・五〇	〇・七〇	—	—	—	〇・七二
女 金票	最高	—	〇・三八	—	—	—	—	△〇・六〇	〇・三八	△〇・三〇	〇・二三	—	〇・四一	〇・三七
	最低	—	〇・一九	—	—	—	—	〇・一六	〇・一九	〇・三〇	〇・二三	—	〇・二七	〇・二二
	平均	—	〇・二四	〇・二八	—	—	—	〇・二九	〇・三三	〇・三〇	〇・二〇	—	〇・三五	〇・二八
女 小洋錢	最高	—	〇・六〇	〇・四二	—	〇・二五	—	—	△〇・四〇	△〇・四五	—	—	—	〇・四三
	最低	—	〇・二八	〇・二九	—	〇・一八	—	—	〇・一五	〇・二五	—	—	—	〇・二三
	平均	—	〇・三六	〇・三三	—	〇・二三	—	—	〇・二五	〇・三五	—	—	—	〇・三〇

備考　×印（男工）の勞働者賃銀は事業の性質上他の事業に比べて頗る高く且工場數少きを以て之を全平均より除外した。

△印の賃銀は一工場のものゝみ。

（六）　朝鮮人の賃銀

回答工場にて朝鮮人を雇用して居るのは染織業、製粉精米業、印刷業の三であつた。其中其賃銀を記入せるは染織業と印刷業とに於ける各一工場に過ぎなかつた故、之を以て朝鮮人勞働者の賃銀を云々することが出來ないかも知れない。

現に男女共に支那人勞働者より幾分高くなつて居るやうであるが、支那人勞働者より不評判な彼等が一般に多額の賃銀を支給せられる筈がないのであつて、多くとも支那人勞働者の賃銀以上に出ないであらう。

朝鮮人勞働者の賃銀（日本貨）

男女別＼事業別	染織業 最高	染織業 最低	染織業 平均	印刷業 最高	印刷業 最低	印刷業 平均
男工、	一・六四円	〇・三〇	〇・四五	二・〇〇	〇・二五	不明
女工	〇・五九	〇・二七	〇・三九	―	―	―

備考　表中の數字は前述の如く一工場のものである。

（七）　賃銀の支拂方法

全く時間拂に依るものが最も多く、回答工場の約半數即ち八十四工場を占めて居る。事業別に於ては鐵工業、化學工業、製材業、飲食物業、印刷業等が大半此方法を使用して居る。出來高拂に依つてのみ賃銀を支拂ふ工場は總數二十九であつて窯業、靴鞄製造業、雜業等に頗る多い。事業の性質上、前記二方法の何れかを用ふる事が出來ないものは、其併用に依るべきものであつて染織業、油坊業、窯業、製粉精米業等には多分に其例を見ることが出來る。併用工場の全數は二十八にして出來高拂工場數と匹敵して居る。支那人勞働者の氣質よりする時は時間拂、出來高拂の何れかに全然依ることは危險であるらしく先進工業國に於て試驗濟の支拂方法・雖も、滿洲に於ては直に取つて應用することが出來ない。兩者併用によつて能率增進を計ることが相當重大なる經營法となるであらう。

賃銀支拂方法

支拂方法＼事業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	其他雜業	計
時間拂工場數	一六	一	九	二	九	八	九	四	一一	一三	―	二	八四
出來高拂工場數	三	一	一	一	一二	―	―	―	―	―	六	五	二九
兩者併用工場數	四	六	三	二	四	一	一	六	一	―	―	―	二八
支拂方法について記入なき工場數	二	一	二	一	二	一	一	二	四	六	―	二	二四
計	二五	九	一五	六	二七	一〇	一一	一二	一六	一九	六	九	一六五

（八）勞働時間

各業に於て日本の勞働時間より約一時間長い。『滿洲工業勞働事情』に依る正味勞働時間を擧ぐれば次の如くである。

事業別	滿洲	大坂
染織工業	一〇・五〇（時・分）	一〇・〇〇（時・分）
機械工業	九・三五	八・三六
化學工業	一〇・二七	九・一二
飲食物工業	九・四八	九・一二

雜工業	一〇・一〇	八・二四
特別工業	九・〇〇	八・三〇

（九）回答工場に於ける昭和元年十二月末日支那人、朝鮮人勞働者數及南滿勞働者の推定

百六十五工場の昭和元年十二月末日支那人、朝鮮人使用勞働者數は總計一八、九〇一人にして次の如き内譯であつた、

	男	女	計
支那人	一六、九五八人	一、五九〇人	一八、五四八人
朝鮮人	一二八	二二五	三五三
計	一七、〇八六	一、八一五	一八、九〇一

然し此數字は常態に於ける換言すれば全能力を發揮せる時の使用數であるか何うか。若し昭和元年十二月末日に於て各工場が全能方を以て作業しつゝあつたのであるならば、別に問題がないのであるが、實際に工場を訪問せる場合、筆者は多くの工場經營者より此の如き調査は冬季閑散の時にすべく注意せらるゝのを聞いたので、前述の期日が工場作業の常態であつた時と思考する事が出來ない。故に常態に於ける即ち全能力を發揮せる時の勞働者數を見當付けんが爲に、昭和元年の生産と生産能力との割合を基礎として推定して見た。即ち全事業を通ずる實際生産の生産全能力に對する割合は四十六%にして甚だ不振であつたのであるが、閑散なる十二月末日の作業狀態を前記の割合と假定し、而して全能力を發揮せる時の勞働者數がそれに比例して増加するものとすれば、約

二三、〇〇〇人の增加となる。然し假令全能力の作業をしても、此割合にて勞働者數が直ちに增すものと思はれざるが故に假りに其二分の一の增加とするならば、一一、五〇〇人となり、斯くて百六十五工場の常態に於ける勞働者數三〇、五〇〇人と推算せられるであらう。

然らば南滿全體の工場勞働者は幾何なりや、元來南滿（主として滿鐵附屬地）には大小六百有餘の工場がある。此數に比較して百六十五工場は約四分の一に過ぎないのであるが、後者の中には邦人の大規模工場を殆ど全部網羅せるを以て、之も亦工場數の多い割合に比例するとは云ひ難い。故に極めて大體の見當を付けることが許さるならば、百六十五工場を除いた約五百內外の工場の勞働者は百六十五工場のそれに匹敵するとして

百六十五工場の昭和元年十二月末日の勞働者數	一九、〇〇〇人
常態に於ける勞働者數	三〇、五〇〇

であるから、結局南滿全體の工場勞働者は

昭和元年十二月末日の勞働者數	三八、〇〇〇人
常態に於ける勞働者數	六一、〇〇〇

と推定せらるゝであらう。

但し右の數字は、滿鐵經營工場を含まざることは凡例に於て述べたるが如し。

最後に各事業に表はれたる勞働者使用の多少を見るに勞働者を最も多く使用するは染織業にして、最も少きは靴鞄製造業である。今一工場當り勞働者數を見れば、

	工場數	勞働者數(男女共)(人)	一工場當り勞働者數(人)
染織業	九	六、六九一	七四三
窯業	二七	三、五五一	一三二
化學工業	一五	一、五九一	一〇六
鐵工業	二五	二、五四八	一〇二
飲食物業	一一	一、〇七一	九七
製材業	一〇	八三六	八四
油坊業	六	四六四	五二
製粉精米業	一二	五二八	四四
雜業	九	三六一	四〇
印刷業	一九	六五四	三四
釀造業	一六	四九八	三一
靴鞄製造業	六	一〇八	一八
計	一六五	一八、九〇一	一一四

昭和元年十二月末日使用勞働者數

事業別	支那人 男	支那人 女	支那人 計	朝鮮人 男	朝鮮人 女	朝鮮人 計	總計
鐵工業	二、五四八	—	二、五四八	—	—	—	二、五四八
染織工業	五、二三四	一、一三〇	六、三六四	一一七	二一〇	三二七	六、六九一
化學工業	一、五五四	三七	一、五九一	—	—	—	一、五九一
油坊業	四六四	—	四六四	—	—	—	四六四
窯業	三、五二〇	三一	三、五五一	—	—	—	三、五五一
製材業	八三六	—	八三六	—	—	—	八三六
飲食物業	一、〇七二	—	一、〇七二	—	—	—	一、〇七二
製粉精米業	二四二	一六八	五一〇	三	一五	一八	五二八
釀造業	四六〇	三八	四九八	—	—	—	四九八
印刷業	六三二	一四	六四六	八	—	八	六五四
靴鞄製造業	一〇八	—	一〇八	—	—	—	一〇八
雜業	二八九	七二	三六一	—	—	—	三六一
計	一六、九五八	一、五九〇	一八、五四八	一一八	二三五	三五三	一八、九〇一

（一〇）日本人職工數

日本人職工は主として支那人勞働者の指導監督に當るものである。而して回答工場の使用全數は

男　八八八人　　女　二一人　　計　九〇九人

であるが故に下級勞働者の指導監督に任ずる者の割合は

下級勞働者百人に對し　　四人八分

となる理由である。

若し百六十五工場が全能力を發揮するならば

日本人職工　　一、四六四人

を要すること、なるべく、又南滿全體としては（六百有餘の工場中日本人の工場を約四百と假定して）

現在に於て　　一、九二〇人

全能力を發揮せる場合に於て　　二、六二〇人

と概算せられる。

昨年末日使用勞働者數

事業別		鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	雜業	計
日本人	男	二二〇	八三	四一	八	一六八	四一	八三	三一	二九	一六三	一四	七	八八八
	女	—	八	—	—	—	—	—	—	—	一三	—	—	二一

（二）日本人職工の賃銀

日本人職工の賃銀は月給にて支給せられるものも相當あつたが、之を日給に換算した。今事業の性質上賃銀の頗る高い靴鞄製造業、及雜業を除いて觀察するならば、

最高賃銀　四・一〇円（鐵工業）乃至　三・一五円（飲食物業）

最低賃銀　二・五〇（油坊業）乃至　一・一一（印刷業）

平均賃銀　三・〇〇（油坊業）乃至　二・〇七（飲食物業）

であつて大體日本勞働者の五割高に當つて居る。

又判然とはして居ないが、此他日本人職工の多くは住宅或は、住宅料を支給せられて居ると思ふ。

昭和元年十二月末日日本人職工賃銀高表

事業別			鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	醸造業	印刷業	靴鞄製造業	雜業	計
日本人	男	最高	円 四・一〇	四・〇四	三・八九	※四・〇〇	三・五七	三・三四	三・一五	三・三〇	三・七八	三・九五	×三・三三	×六・六五	三・七一
		最低	一・九〇	一・六八	一・七二	二・五〇	二・〇〇	一・九五	一・一七	一・九一	二・一八	一・一二	一・八三	一・八四	一・八[illegible]
		平均	二・九八	二・九三	二・九四	三・〇〇	二・六四	二・四四	二・〇七	二・五一	二・六八	二・五三	二・七〇	三・四二	二・六七
	女	最高	―	一・五四	―	―	―	―	―	―	―	一・五七	―	―	一・五六
		最低	―	〇・九二	―	―	―	―	―	―	―	〇・九〇	―	―	〇・九一
		平均	―	一・二六	―	―	―	―	―	―	―	一・二三	―	―	一・一九

備考　×印の職工の賃銀は事業の性質上頗る高く且回答少かりしを以て全體の平均より除外した。

※印の賃銀は單に一工場のものである。

(一一)　勞働者の宿舍

回答工場に於ける勞働者收容の宿舍有無は

宿舍を有する工場數　　一一〇

宿舍無き工場數	三〇
有無の記入なき工場數	二五

にして、大部分宿舍を有つて居る。勿論此中には僅に一部分を收容するに足る宿舍をしか有せざるものもあるに相違ないが、大體に於て滿洲の工場は概ね宿舍を支給しつゝありと推定して良いであらう。

然し特別の建築物を以て宿舍に當てゝ居るものは染織工業化學工業等の比較的大規模經營の工場のみであつて、他は工場を直に宿舍となし、勞働者を其中に住居せしめつゝあるのである。

其何れにせよ、事業別にして宿舍の多きは染織、化學、油坊、窯業、製材、飲食物、製粉精米、釀造、靴鞄の諸業である。

勞働者の宿舍の有無に就いて

事業別＼宿舍の有無	宿舍を有する工場數	宿舍なき工場數	有無の記入なき工場數	計
鐵工業	九	一二	四	二五
染織工業	八	一	ー	九
化學工業	一一	二	二	一五
油坊業	六	ー	ー	六
窯業	二三	三	一	二七
製材業	七	ー	三	一〇
飲食物業	一〇	ー	一	一一
製粉精米業	八	二	二	一二
釀造業	一〇	二	四	一六
印刷業	五	七	七	一九
靴鞄製造業	六	ー	ー	六
其他雜業	七	一	一	九
計	一一〇	三〇	二五	一六五

第七章　工業用水

滿洲の水道料金は頗る高い、前著に於て述べた如く、阪神地方の約三倍に當つて居る。回答工場の用水供給は井戸に依るものが多いのであるが、然し其中には硬質のもの多く、酒造業の如く特に軟質を慊ふ工場以外は製品の質を粗悪にし、且つ汽罐に故障を齎らすを以て大に不便を感じて居る。故に良質の水を要する工業は南滿洲に於ては大體起り得ぬと言つてよいであらう。

井水のみを使用するもの及水道と井水とを併用するものとを合して六十五工場であるが、水質の不良を訴へたものは十六工場に及んで居る。

水道使用工場數	三三
井水使用工場數	五三
其中質の不良を訴へたる工場數	一六
水道井水併用の工場數	一二
河水使用の工場數	三
水を使用せざるもの及使用の有無を記入せざるもの	六四

井水は質の良否に拘らず、湧出量に於ては不足がない。

水道を使用する三十三工場及井戸、水道併用の十二工場の昭和元年中の水道料金は三四、七八七圓にして水道料

の不廉が問題とせらる、今日聊か物足りないやうに思はる、小さい數字であるが、料金を記入せる工場が少かつたここに歸因する。

昭和元年使用水道料金

鐵工業	一二、四二〇圓	染織工業	二、九二八圓
化學工業	一〇、一〇三	油坊業	六、四九〇
窯業	—	製材業	—
飲食物業	—	製粉精米業	六六六
釀造業	二、一八〇	印刷業	—
靴鞄製造業	—	雜業	—
計	三四、七八七円		

水道料金比較表

大連	沿線	大阪	東京
三立方米迄四十八錢以上一立方米每二十六錢を加ふ。	一立方米 十五錢	一立方米に付 六錢 但し汽罐に使用する場合 一萬石迄一立方米に付 八錢八厘	一日使用量十五立方米迄は量水器の口徑に應じ其料金を左の通りとし以上一立方米を增す每に湯屋は

動力汽罐用は一立方米毎に二十四錢		一萬石以上一立方米に付　七錢七厘 三萬石以上一立方米に付　六錢六厘 五萬石以上一立方米に付　五錢五厘	三錢其他は五錢を加ふ。

量水器口徑		基本料金
十二又は十三ミリメートル		七十錢
十六	同	八十五錢
二十	同	九十錢
二十五	同	一圓十錢
三十	同	一圓二十五錢
五十	同	一圓六十錢
七十五	同	二圓

第八章　金融

滿洲に於ける工業金融が特に逼迫しつゝある所以は前著に述べて置いた故、玆に再説しない。

（一）金融を受けつゝある工場數と融通金額

金融は逼迫こそして居るが、過去に於ける借財の返濟出來ない工場及無理をしても金融を受けつゝある工場は頗る多いやうに見受けられる。即ち百六十五工場中借財を有する工場は七十四に達し、總數の約二分の一を占めて而して其融通金額は約一七、二四〇、〇〇〇圓にして、之を百六十五工場全拂込資本金額四九、三四〇、〇〇〇に對

居る。

而して其融通金額は約一七、三四〇、〇〇〇圓にして、之を百六十五工場全拂込資本金額四九、三四〇、〇〇〇に對比する時は、三分の一强に相當する。

又前記七十四工場に就いてのみ此割合を採れば次の如くである。

拂込資本金額	二九、二七一、五一八圓
融通金額	一七、三四二、七九七圓
割合	五九%

事業別に於て拂込資本額に對する融通金額の比率の高いのは、靴鞄製造業を首位として次の如き順位を取つて居る。

	融通工場數	其拂込資本	其融通金額	拂込に對する融通金の割合
靴鞄製造業	三	一六八、〇〇〇圓	二三一、〇〇〇圓	一三八%
製材業	五	一七九、〇〇〇	一七五、〇〇〇	九八
染織工業	六	八、七七六、六二五	七、九四八、一八四	九一
油坊業	三	八九〇、〇〇〇	七一八、〇〇〇	八一
鐵工業	一〇	一、二〇二、〇〇〇	八〇五、九〇〇	六七

融通を受けつゝある工場表

業別＼融通の有無	融通を受けつゝある工場數	融通を受けざる工場數	計
鐵工業	一〇	一五	二五
染織工業	六	三	九
化學工業	九	六	一五
油坊業	三	三	六
窯業	一一	一六	二七
製材業	五	五	一〇
飲食物業	二	九	一一
製粉精米業	八	四	一二
釀造業	一〇	六	一六
印刷業	六	一三	一九
靴鞄製造業	三	三	六
雜業	一	八	九
計	七四	九一	一六五

拂込資本に對する融通金額の割合表

業別	融通を受けつゝある工場數	其拂込資本	其融通金額	拂込資本に對する割合
鐵工業	一〇	一、二〇二、〇〇〇圓	八〇五、九〇〇圓	六七%
染織工業	六	八、七七六、六二五	七、九四八、一八四	九一
化學工業	九	三、三〇五、〇〇〇	七九六、三一三	二四
油坊業	三	八九〇、〇〇〇	七一八、〇〇〇	八一
窯業	一一	一、二一〇、〇〇〇	三五八、〇〇〇	三〇
製材業	五	一七九、〇〇〇	一七五、〇〇〇	九八
飲食物業	二	八、五八五、八九三	四、七七二、五〇〇	五六
製粉精米業	八	三、六七五、〇〇〇	一、〇三五、五〇〇	二八
釀造業	一〇	八二七、五〇〇	三三四、七〇〇	四〇
印刷業	六	四四七、五〇〇	一六四、七〇〇	三七
靴鞄製造業	三	一六八、〇〇〇	二三一、〇〇〇	一三八
雜業	一	五、〇〇〇	三、〇〇〇	六〇
計	七四	二九、二七一、五一八	一七、三四二、七九七	五九

(二) 利率

滿洲の金利は頗る高い。最低年利率では製材業某工場の三分四厘、飲食物業某工場の四分、染織、化學、釀造業

某工場の五分といふのがあるけれど、之等は關東廳等の低利資金融通に基くものなるが如く其他は最低と雖も一割内外である。最高利率に至つては鐵工、化學、製粉精米業某工場の二割四分乃至二割三分五厘を筆頭にして、普通一割四分見當である。

次に事業別融通金の平均年利率に就いて見れば染織、製材、飲食物工業の三が一割以下なるのみにして、他の九業は一割二三分の處に居り、全工場の平均は一割一分二厘七毛となつて居る。

年利率表

業別	最高	最低	平均
鐵工業	割 二・四〇	割 〇・九二	割 一・三〇六
染織工業	一・三一	〇・五〇	〇・九七
化學工業	二・四〇	〇・五〇	一・〇六
油坊業	一・〇九	〇・九九	一・〇四
窯業	一・五〇	〇・八五	一・二一八
製材業	一・一三	〇・三四	〇・七六
飲食物業	一・二〇	〇・四〇	〇・八四八
製粉精米業	二・三七	〇・八八	一・二四
釀造業	一・五〇	〇・五〇	一・〇八

印刷業	一・四六	〇・九九	一・二一
靴鞄製造業	一・四六	一・二七	一・三三
雜業	×一・四六	一・四六	一・四六
平均	一・六〇七	〇・八〇	一・一二七

備考　×印は融通を受けつゝある工場は唯一なる爲之を各項目に入れた。

（三）工場財團

工場財團時價の見積を明記し呉れた工場の、拂込資本と財團時價とは

拂込資本金額	二八、七八五、二六八圓
財團時價見積額	二四、六三八、三〇七

にして略々一致して居る。若し此數字が眞なりとせば滿洲工業の爲には誠に嘉すべきことで無ければならない。何となれば前著に於て述べしが如く、滿洲工業が其原料及製品を擔保として金融を受くること極めて少く且つ困難なるに於ては、工場財團は擔保物の唯一のものに非ずんば主たるものであるからであつて、而もその時價が拂込資本と略々一致して居ることは滿洲の工業の基礎が相當に堅いことを物語るものだからである。

然し工場主自身の見積には、當然多分の主觀が混入して居ることを豫期せねばならないのであつて、數年に亙つて在滿工業の萎靡不振を聞く今日、恐くは前記數字より遙に小さきものを正當なる財團時價とするであらう、でなければ、金融業者と工場主との間に工場財團の擔保能力に關して繰返された論爭が起る筈が無い。

工場財團の見積と拂込資本

業別	工場財團時價を記入せる工場の拂込資本	工場財團の見積額
鐵工業	一、五六九、〇〇〇圓	一、五二八、七八〇圓
染織工業	六、四八八、五六八	七、三五五、六五二
化學工業	三、六六六、〇〇〇	二、一八八、〇七五
油坊業	九八〇、〇〇〇	七九〇、〇〇〇
窯業	三、六九八、〇〇〇	三、五二二、〇〇〇
製材業	五五五、〇〇〇	四三〇、〇〇〇
飲食物業	八、七〇四、〇〇〇	六、六五五、〇〇〇
製粉精米業	四六二、〇〇〇	三六六、九〇〇
釀造業	一、八四七、五〇〇	一、〇八九、五〇〇
印刷業	二九九、〇〇〇	四〇四、四〇〇
靴鞄製造業	一八八、〇〇〇	九五、〇〇〇
雜業	三二八、〇〇〇	二一三、〇〇〇
計	二八、七八五、二六八	二四、六三八、三〇七

第九章　販路、競爭、代金回收方法

滿洲工業品の販路が、著しく伸縮性に缺けて居る爲に工業の經營が困難であること及何故に伸縮性を缺くかといふ事に就いては大體前著に於いて論じて置いた故、玆には以下三四の項目に關する回答を記述して滿洲工業の販路を窺はふ。

（十）　昭和元年に於ける製品の消化狀態

回答工場中、製品の消化に就いて記入なきものが二十九工場あり、而して殘る百三十九工場の中、七十二工場までが消化不良を訴へて居る。之を良好なるもの三十四工場、普通なるもの二十工場に比較する時尙十八工場の多きに居り、如何に滿洲產製品の賣行が惡かつたかを知ることが出來やう。

尙次表に註文製產の項目があるが、此の如き工場は註文製產なるが故に製品消化の良否なしと回答して來たものであつて、一應尤もであるが筆者は如何なる形式の製造に從事するも、製品消化の良否が景氣不景氣を意味する以上、註文の多少を記入して欲しかつたし、又それを豫期して居たのである。

業別にして特に不況であつたのは染織、油坊、窯業、製材、製粉精米、釀造、印刷の諸業であつた。

製品消化狀態表

業別 ＼ 消化狀態	良なりし工場數	普通なりし工場數	註文製産に從事せし工場數	不良なりし工場數	良否不明なりし工場數	計
鐵工業	六	—	六	七	六	二五
染織工業	二	—	一	六	—	九
化學工業	六	—	—	七	二	一五
油坊業	二	一	—	三	—	六
窯業	六	三	一	一四	三	二七
製材業	一	一	—	八	—	一〇
飲食物業	三	三	—	三	二	一一
製粉精米業	三	二	—	五	二	一二
釀造業	一	四	—	九	二	一六
印刷業	一	三	一	七	七	一九
靴鞄製造業	一	二	—	一	二	六
雜業	二	一	一	二	三	九
計	三四	二〇	一〇	七二	二九	一六五

（二） 不況の特殊原因

滿洲工業の不振なるは一般財界の沈滯に負ふこと勿論であるが、尙滿洲特有の原因が存するに相違ないのであつ

て、各工場に其記入を乞ふた。然し筆者の要求を容れられたのは僅少の工場であつて、之のみを以てしては十分に説明し得られるか何うか疑はれる。支那動亂、奉天票暴落による支那人購買力の減退が滿洲工業に悪影響を及ぼしたことは稍々明に觀取されるが、外國商品との競爭、支那人工場との競爭、日貨排斥等に伴ふ賣行の如何に到つては豫想に反して頗る記入が少かつた。之等の事に就いては實際屢々耳にせる處なるを以て、記入漏れと解釋せざるを得ないのであつて、競爭商品に關する(四)(五)項の記述を參照すれば或は此缺を補ふことが出來ると思ふ。

次に示す表は原因を事業別に見たのであるが、それによれば大體支那動亂奉天票暴落が總ゆる事業に如何に甚大なる影響を與ふるかを見るべく、又各種事業によつて更に自ら特種原因の存することを知るであらう。

昭和元年販賣不良の原因

業別＼原因別	支那動亂奉票暴落	外國商品の壓迫	支那人工場との競爭	生産過多	滿鐵關東廳其他大會社の註文減少	製品暴落による豫想外の損失	日貨排斥	防穀令による輸出禁止	農作不良豫想と特産商の不振	内地朝鮮の關稅改正及需要減少	計
鐵工業	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一
染織工業	五	一	｜	｜	｜	二	｜	｜	二	一	一一
化學工業	四	一	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	一	七
油坊業	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	二	三
窯業	二	一	一	｜	四	｜	｜	｜	｜	｜	八
製材業	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	三	三
飲食物業	二	一	｜	一	｜	｜	一	｜	｜	｜	五

製粉精米業	二	一	｜	｜	｜	｜	｜	三	一	一	八
釀造業	六	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	八
印刷業	三	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	四
靴鞄製造業	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
雜工業	四	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
計	二五	八	一	三	四	二	一	三	三	八	五八

（三）製品の消化良好なりし原因

如何に不振なりしとはいへ、良き結果を得た工場も僅少ながらあつた。其原因を記入せるもの十三にして、其中大會社の註文多かりしことを揭げたもの四あつた。而して別に建築盛なりし爲といふのが三あつたが、滿鐵建築物の改築、撫順市街の移轉等を意味するものであつて、此原因三を前者に加ふれば實に全原因の過半數を占むるのである。之は如何に滿鐵等の大會社によつて滿洲工業が其命脈を保つて居るかを示すものであつて、多くの考へさせられる材料を提供して居るものと言ふべきであらう。

又製品の販路が確定せる爲に一般の不況にも拘らず良好なりしもの一ある。僅に一に過ぎないが、販路の確定が如何に工業經營に必要であり、而して滿洲工業の大多數は未だ確定せる販路を有つて居らぬことを有力に證據立てゝ居ると思ふ。兎に角興味ある數字ではある。

昭和元年製品消化良好の原因

業別＼原因別	大會社の註文多かりし爲	建築旺盛なりし爲	販路確定	奥地支那鐵道の需要增	朝鮮奉天糧米廠の需要增	内地の需要增	製品の價値認められし爲	計
鐵工業	二	|	|	一	|	|	|	三
染織工業	一	|	|	|	|	|	|	一
化學工業	|	|	一	|	|	|	|	一
油坊業	|	|	|	|	一	|	一	二
窯業	|	一	|	|	|	一	|	三
製材業	|	一	|	|	|	|	|	一
飲食物業	|	|	|	|	|	|	|	|
製粉精米業	|	|	|	|	|	|	|	|
釀造業	|	|	|	|	|	|	|	|
印刷業	|	|	|	|	|	|	|	|
靴鞄製造業	一	|	|	|	|	|	|	一
雜業	|	|	|	|	|	一	|	一
計	四	三	一	一	一	二	一	一三

（四）在滿邦人工業は何處の商品と競爭するか。

前述の如く（四）（五）項に於て記述することは在滿邦人工業製産品の消化不良を觀察する際に當り重要なる材料を

提供するものである。

以下に於て見らるゝ如く、在滿邦人工業は各方面からの競爭を受け、而も其競爭たるや支那關税制度其他の關係上頗る有力なるものなるが故に、滿洲に於ける工場經營が如何に困難であるかを推知し得る。

南滿邦人工業の最も大なる競爭相手は論ずる迄もなく日本にして、次は滿洲自身の中に存在する日支工場であるが、支那本土、米國、獨逸、英國、朝鮮、北滿等も有力なる競爭者である。試に百六十五工場が受けつゝあつた各方面からの競爭を表にして見やう。

競爭相手	競爭を受くる在滿邦人工場數	競爭相手	競爭を受くる在滿邦人工場數
日本	四九	英國	五
朝鮮	七	米國	一四
在滿支那人工場	一九	獨逸	一三
日支人同業者	二四	佛國	三
北滿	八	印度	五
支那本土	一八	白國	二
歐洲一般	一	其他	一三

而して日本商品の最も鋭く衝りて來る處は鐵工、染織、化學、油坊、窯業、製材、飲食物、釀造の諸業

朝鮮のそれは
　製材、製粉精米（主として米）、釀造
北滿のそれは
　製材、製粉精米
支那本土のそれは
　染織、化學（鹽、肥料等）、油坊、窯業（北支那產のもの）、飮食物（砂糖、煙草等）の諸業
米國のそれは
　鐵工、化學、油坊、製材、製粉精米（主として小麥粉）の諸業
獨逸のそれは
　鐵工、化學、油坊、窯業の諸業
英國のそれは
　染織（主として毛織物）、化學の諸業
印度のそれは
　染織（主として麻袋）、化學（主として肥料）の諸業
佛國のそれは
　染織業

白國のそれは

窯業（主として硝子）、化學の諸業

其他外國のそれは

化學並に油坊（主として肥料及び鹽）、製材、製粉精米（主として小麥粉）の諸業

であつて、在滿日支人の工場によつて受くる競爭は各業に亙つて居ること勿論である。

之を逆に事業別の上から見れば（在滿日支人工場の競爭を除く）

鐵工業の受くる競爭の相手は

日本、米國、獨逸

染織工業

日本、支那本土、英國、獨逸、佛國、印度

化學工業

日本、支那本土、英國、獨逸、米國、其他外國

油坊業

日本、支那本土、獨逸、米國、其他外國

窯業

日本、支那本土、獨逸、白耳義

製材業
日本、北滿、米國、朝鮮、其他外國
飲食物業
日本、支那本土
製粉精米業
北滿、朝鮮、米國、日本、支那本土、其他外國
釀造業
日本、朝鮮
印刷業
日本
靴鞄製造業
日本、米國
雜業
日本
である。

昭和元年邦人百六十五工場競爭を受けた相手に就いて

業別＼競爭相手別	日本	朝鮮	在滿支那人工場	在滿日支人工場	北滿	支那本土	歐洲一般	英	米	獨	印度	佛	白	其他外國	計
鐵工業	一一	—	—	五	—	—	一	—	五	四	—	—	—	—	二六
染織工業	二	—	一	二	—	三	—	一	—	一	三	二	—	—	一五
化學工業	四	—	一	一	—	五	—	四	三	四	一	一	一	四	二九
油坊業	三	—	一	一	—	二	—	—	一	二	一	—	—	二	一三
窯業	八	—	五	五	—	四	—	—	—	二	—	—	一	一	二六
製材業	四	四	—	—	四	—	—	—	三	—	—	—	—	三	一八
飲食物業	二	—	—	一	—	二	—	—	—	—	—	—	—	一	六
製粉精米業	一	二	二	一	二	一	—	—	一	—	—	—	—	一	一一
釀造業	九	一	三	四	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	一八
印刷業	一	—	五	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	七
靴鞄製造業	一	—	—	一	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	三
雜業	三	—	一	三	一	—	—	—	—	—	—	—	—	一	九
計	四九	七	一九	二四	八	一八	一	五	一四	一三	五	三	二	一三	一八一

（五）在滿邦人工場は競爭に於て如何なる强味又は弱點を有するか。

此項に於て先づ弱點に關する若干の考察を加へやうと思ふ。但し之は次章に於て述べんとする「在滿工業が生産

並に販賣上最も苦痛とする點及び滿洲工業振興策に關する意見』と相補不可離の關係を有するものにして、兩者を併讀せざれば其眞相を明かにする事が出來ないといふことを特に注意して置きたい。

邦人工業は獨り日本、其他諸外國よりの競爭を受くるのみならず、他方支那人工場と對抗せねばならぬ。之は他國に於て事業を創むる者の當然豫期すべきことであるが、邦人にとり可成り重い負擔であつて、兩者に對する十分なる智識を有たなければ、自己の事業を好守する事が困難である。故に其强味、弱味を述ぶるに當つても、外國に對する夫等の諸點と支那人工場に對する諸點とを大體區別して見る必要があると信ずる。勿論筆者と雖も玆に留意することを吝でなかつたのであるが、筆者の質問の不徹底とそれによる不明瞭な回答の多かつた事等により、遺憾ながら十分に盡すことが出來なかつた。又外國と支那人工場とに對する强弱點を區別しても、其中には兩者に共通せるものがあるに相違なく、之等の事は讀者の御判讀に俟たうと思ふ。

（A） 外國の競爭に對する弱點

價格高　第一に擧げらるべきは、價格高である。以下述ぶるやうな諸の缺點の存する爲、何といつても外國商品の價格に及ばないのであつて、滿洲の如き文化の劣れる土地に於て精巧なる工業を營むことは頗る苦心を要する次第である。

考へやうに依ては總ての事業が此弱點を有つて居るといふも過言でない、否當然の歸結ではあるけれど、特に此文字を揭げた回答工場を抽出して、其主なるものに就いて見れば左の六業である。

鐵工、染織、化學、油坊、窯業、製材

（但し之は外國品のダンピングと相俟つて考察せらるべきものにして、唯一の工場しかないが、製粉などは、滿洲の重要工業なる事より見て、此中に入れても良いかと思ふ。）

原料高　第二は原料高であつて、之は原料の章と照應するものである。而して凡ゆる事業及び凡ゆる原料に就いて此困難があるのでは勿論無いが、全體として原料安の恩惠を受くること少く、原料高による苦痛の方が大きいやうである。原料難を感じて居る主なる事業には左の六業が入る。

鐵工、化學、製材、飲食物、製粉精米、印刷の諸業

（但し大連油坊が經營難に陷れる根本原因は日本農村の疲弊と、大豆の價格高にあるを以て此中に加ふべきものと思ふ）。

需要者の無智と商標負け　第三は需要者の無智と商標負けであるが、之は次の三項目を含み、何れも在滿邦人工業經營難の有力なる要素を形成する。

1、在滿邦人消費者が品質を顧みず徒らに價格の低廉を欲すること

2、在滿日華人共に品質、價格の如何に拘らず、習慣として舶來品を好むこと。

3、滿洲工業の創設未だ新らしく、獨り滿洲に於てのみならず、夫以外の地に於て堅き地盤と信用とを有せざること。

之に屬する主要工業は左の二業である。

染織、釀造の諸業

設備の不完全、資本の缺乏、技術の不良　第四は在滿邦人工業には、資本の大なるもの少く、爲に運轉資金に窮して居るのみならず、設備も亦不完全にして、且つ滿洲にては優秀技術者を得ること困難なる爲、良き製品の産出が不可能なることである。

此點に關し最も不便を感じつゝあるものは

鐵工業

である。

運賃高　第五として運賃高がある。輸出を主とするものは、常に苦しんで居る處であつて、

化學工業、油坊、製材、製粉精米

諸業の或工場は打撃を蒙りつゝある。

日本朝鮮の關税　第六の問題であつて、之が爲に著しき不利益を受けて居るものは

製材業

である。後述の如く、日本朝鮮を相手として立つて居る斯業が、日本並に朝鮮に於ける木材關税問題に神經を波立たせるのは、無理からぬ事であらう。

外國品のダンピングと宣傳の不足　之は他の弱點に比較する時、記入の數少く、一見問題にあらざるが如きも、恐らく記入の如何に拘らず、相當重大なる性質と思惟されるが故に、又實際に於てはダンピングによつて各業が大に禍せられて居ると疑はれるが故に、敢へて特筆した。

注意　以下弱點强味に關する表を掲げるが、之等は極めて杜撰のものであつて、極く大雜白な概念を得るに過ぎない價値を有するといふに留る。

外國商品に對する弱點に就いて記入せる工場數

業別＼弱點別	價格高	原料高	需要者の無智	商標負け	宣傳不足	外國品のダンピング	資本の小全設備不完	技術不良	運賃高	内地朝鮮に於ける關稅適用	地の不利	水質の不良
鐵工業	二	二	—	—	—	—	二	二	—	—	—	—
染織工業	二	—	一	一	—	—	—	—	—	—	—	一
化學工業	二	三	—	—	一	—	—	—	一	—	—	—
油坊業	四	一	—	—	—	—	—	—	一	—	一	—
窯業	五	—	—	—	一	一	一	—	—	一	三	—
製材業	四	四	—	—	—	—	—	—	一	三	—	—
飲食物業	一	二	—	一	—	—	一	—	—	—	—	—
製粉精米業	一	四	—	—	—	—	一	—	二	—	—	—
釀造業	一	—	四	二	—	—	—	—	—	—	—	—
印刷業	—	二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
靴鞄製造業	—	一	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—
雜業	一	—	一	—	—	—	—	—	一	—	—	—
計	二三	一九	六	四	二	一	五	三	六	四	四	一

備考　此中には支那人工場に對して該當するものも二三存すべし。

（B） 支那人工場に對する弱點

支那人工場に對する弱點は外國商品に對する弱點に比べて頗る少い。之が事實でないかとも思はれるが、然し支那人工場よりの壓迫に依る邦人の困難を屢々耳にする今日、假令回答が少なくとも之を逸することは能はざるを以て左に重要なりと思はれる弱點を二三拾つて掲げて見た。

職工使用に於て劣れること、並に工賃高　支那人工場は同民族の職工を使用するが故に、職工の待遇に於て劣つて居ながら、尙有利に職工を使用し得るの利便がある。此問題は常に邦人工場に附き纏ふべき性質のものであると思はれるが、支那人勞働者使用の便否を述べた時に言及せる言語に關する主張は此弱點を緩和する一方法とならないであらうか。兎に角職工の使用と其待遇に於て支那人工場より拙劣であることを記入せるものは左の各業の一乃至二の工場であつた。

鐵工業、化學工業、油坊業、印刷業、雜業

諸經費高　邦人工業は支那人工場よりも、諸の經費に於て多く掛かるといふ缺點がある。之に就いては

染織、製材、印刷、雜業

に於て一乃至三の記入があつた。

金融の不利と貨幣相場變動による不利　金融上支那人は自ら融通の利く範圍內に於て事業をすることゝ、日支の金融機關を利用し得る便利とを有するに反し、邦人工場は多く實際の能力より大なる規模に事業をする傾向と、日本側金融機關にしか依らない不便とがあるやうである。

又邦人は一般に爲替相場の智識少く且つ其技能拙劣なるが故に、之に巧なる支那人に對抗することが出來ない。

此弱點を記入せるは

染織、油坊、飲食物、釀造

等一乃至二の工場であつた。

税金の不利　附屬地外の支那人を賈客とする、工業の中には、支那人同業者よりも税金に於て多少不利なるものがあり、又日貨排斥的意味に於て正當なる手續による課税の許可を受くることを能はず、永らく其不利に甘んじて居るものもある。

染織、化學、釀造

等の諸業に於て此の如き不便を忍びつゝある工場が各一つ宛あつた。

日貨排斥　之によつて打撃を受けたことを記入せる工場は案外少かつた。即ち

化學工業、飲食物工業

とに於ける二工場に過ぎない。

支那人工場に對する弱點に就いて記入せる工場數

業別＼弱點別	職工使用の不利及工賃高	諸經費高	金融上の不利と貨幣相場に對する智識と技術の拙劣	支那税金上に於ての不利	日貨排斥	支那人の副業的小工業との競爭	支那人の投資
鐵工業	一	―	―	―	―	―	―
染織工業	―	一	二	一	―	一	―

化學工業	一	—	—	一	一	—	—
油坊業	一	—	一	—	—	—	—
窯業	—	一	—	—	—	—	一
製材業	—	—	—	—	—	—	—
飲食物業	—	—	—	—	一	—	—
製粉精米業	—	—	一	—	—	—	—
釀造業	—	—	一	一	—	—	—
印刷業	二	三	—	—	—	—	—
靴鞄製造業	—	—	—	—	—	—	—
雜業	一	一	—	—	—	—	—
計	六	六	五	三	二	一	一

扨て然らば次に如何なる强味を有するか。之も外國に對するものと、支那人工場に對するものとの二項に分つて略述しやう。

（A）外國に對する强味

地の利　滿洲並に其密接せる地方に需要を求むる時、在滿工業が他國のそれに比して、地の利を得て居ることは論ずる迄もない。殊に註文生産に於ては納期が早いといふ得點がある。

鐵工業、化學工業、窯業、飲食物業、雜業等に於ては此利便を受くる工場が多い。

原料安　關東州は關稅制度上自由區域であり、滿洲は極めて低き關稅率を課せらるゝに過ぎない。又滿洲夫自身は農業地、鑛産地であつて、各種の原始産物を出す。故に原料の輸入と滿洲土産に俟つ工業は大體に於て有利であると言つてよい。而して

鐵工、染織、釀造、雜業

の諸業に於て此の如き恩典を受くる工場が相當の數に上つて居るのであるが、全體として見る時、原料難の方が力强いことは先に屢々記述せる如くである。

工賃安　勞働賃銀の低廉なることを玆に擧げるのは蛇足も甚しいと言はねばなるまい。

價格安　斯くて在滿工業製品は當然價格が安くならねばならないのであるが、事實は之に反し、此適用を受くるものは僅に

化學工業、油坊業、窯業、釀造業、雜業

の中の數工場に過ぎない。

關東廳、滿鐵等の註文　此强味を有すると明答を與へたものは

鐵工業、飮食物業

に於ける各一工場に過ぎなかつた。然し次の項に於ても知る如く、關東廳、滿鐵への賣込が如何に多いかを見る時、それは明答數以上の重大性を有するものであると思はれる。

外國商品に對する强味に就いて記入せる工場數

業別 ＼ 强味別	地の利	工賃安	原料安	價格安	關東廳軍隊滿鐵等の註文
鐵工業	四	二	三	—	一
染織工業	—	二	二	—	—
化學工業	二	一	一	四	—
油坊業	—	—	—	一	—
窯業	五	一	一	一	—
製材業	—	—	一	—	—
飲食物業	二	—	—	—	一
製粉精米業	—	—	一	—	—
釀造業	一	二	四	二	—
印刷業	一	—	一	—	—
靴鞄製造業	—	—	一	—	—
雜業	二	二	二	一	—
計	一七	一〇	一七	九	二

備考　此中には支那人工場に對しての强味も幾分含まれて居るであらう。

（B）支那人工場に對する强味

品質の優良　支那人工場の製品に對して、邦人工場製品の誇る處は一に品質の優良なることである。而してそれは左の三事情に負ふものなることは疑ひを容れない。

1、資本の大、設備の完全、大量生産(例へば鐵工、窯業に於けるが如し)

2、技術の優秀(例へば、染織、精米業に於けるが如し)

3、日本人を相手とする事業にあつては、日本人の嗜好に適する樣に生産すること（例へば精米業に於けるが如し）

品質の優良を以て强味となせる工場は

鐵工業	一	化學工業	二	油坊業	二
窯業	七	飲食物業	二	製粉精米業	三
雜業	三	計	二〇		

を數へる。

資本の大、設備完全、技術優秀　之等の諸點は、支那人工場との競爭に於て邦人工場の是非とも有つて居らねばならぬ所であつて、否寧ろ有つて居ることが當然なりと思はれるのであるが、此强味を記入せる工場が僅に六に過ぎないのは誠に心細い限りでなければならぬ。過去に於ける在滿邦人工場の不振と將來に於ける發展如何とに對する解決の鍵は其有力なる一を玆に見出すことが出來ないであらうか。其六工場といふは次の四事業に於けるものである。

鐵工業　一　　染織工業　二

窯業　二　　製粉精米業　一

販賣に當り堅き地盤を有すること　此强味を揭げたものは僅に油坊業の一工場に過ぎなかつたが、玆に特筆する所以は、滿洲工業の大多數の販路が伸縮性に乏しく、常に動搖して居る事實に鑑み當に珠玉の文字であつたからである。

支那人工場に對する强味に就いて記入せる工場數

業別＼强味別	品質優良	技術の優秀	資本の大設備完全	販賣に於ける地盤	稅金の輕きこと
鐵工業	一	｜	一	｜	｜
染織工業	｜	二	｜	｜	｜
化學工業	二	｜	｜	｜	｜
油坊業	二	｜	｜	一	｜
窯業	七	｜	二	｜	｜
製材業	｜	｜	｜	｜	｜
飲食物業	二	｜	｜	｜	一
製粉精米業	三	一	三	｜	｜
釀造業	｜	｜	｜	｜	｜
印刷業	｜	｜	｜	｜	｜

靴鞄製造業	一	一	一	一	一
雜業	三	一	一	一	一
計	二〇	三	三	一	一

備考　此中には外國商品に對して該當するものもあるべし。

（六）昭和元年に於ける在滿邦人工場製品の主要販賣先

製品の約二〇%以上を需要せるものを主要販賣先として、統計を採つて見たが、回答工場の全主要販賣先二百三十六の中、滿鐵、關東廳等は四十九の多數を占め、全體の二割强に當つて居る。又之に在滿大會社の需要、支那鐵道及官廳、滿鐵消費組合を加へる時は無慮六十七に上り、全體の三割弱に當ることになる。之を見ても如何に在滿邦人工業の滿鐵、關東廳其他に負ふかを知るであらう。と同時に、之迄の事業は之等の需要者以外に如何に發展して居なかつたか、而して若し將來滿洲に於て工業を創めんとする者あらば、宜しく之等の需要者以外廣く支那人を相手とするの抱負を以て進むべきことを教ふるであらう。

滿鐵、關東廳等を主要販路とする工場の多かつたのは、左の七業である。

鐵工業、染織工業、化學工業、窯業、釀造業、印刷業、雜業

在滿工業の性質として、滿洲の日支人を主要販賣先とするのは蓋し當然の事である。其數は後表にも見る如く、全販賣先數の二分の一に當る。唯注意すべきは、其中支那人を主要需要者とする數が、日本人を主要需要者とする數と同一なりし事であつて、邦人工場が支那人に對する販路の開拓に未だし、換言すれば支那人を目標とする工業の少いことを暗に示して居ると思はれる點である。

の少いことを暗に示して居ると思はれる點である。

次に日本及朝鮮を主要販路とする工場の多い事業は、左の六業であつて、之等の多くは關稅に苦しめられて居る

鐵工業、染織工業、化學工業、油坊業、製材業、飲食物業

支那本土を主要販路とする工場も相當多い。其事業の主なるものを擧ぐれば左の五業である。

染織工業、化學工業、油坊業、窯業、釀造業

南洋、印度、歐洲方面に販賣先を有するものに至つては未だ極めて少く、油坊業の歐洲に於けるものを擧ぐるに留まるであらう。

主要販路に關する事業別工場數

販路別＼業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	雜業	計
滿鐵	一二	一	一	|	一〇	一	|	|	|	四	|	二	三一
關東廳等	六	一	△一	|	三	|	×一	|	|	四	×一	一	一八
滿鐵消費組合	|	|	|	|	|	|	|	三	一	|	|	一	五
大會社	六	|	一	|	|	|	|	|	|	一	|	|	八
支那鐵道及官廳	三	一	|	|	|	|	|	|	|	一	|	|	五
以上計	二七	三	三	|	一三	一	一	三	一	一〇	一	四	六七
滿洲一般(特に日支人の別なきもの)	七	五	六	|	一三	四	七	五	四	一	|	四	五六
同日本人	二	|	三	|	三	一	二	二	四	八	五	一	三一

同 支那人	三	二	七	二	六	一	二	一	七	一	—	—	三二
滿洲計	一二	七	一六	二	二三	六	一一	八	一五	一〇	五	五	一一九
朝鮮	二	二	二	二	—	六	—	一	—	—	—	—	一五
日本	—	二	三	五	一	一	二	—	—	—	—	一	一五
支那一般（特に北南の記入なきもの）	—	一	一	一	二	—	—	—	—	—	—	—	五
同 北部	—	—	二	二	—	一	—	—	一	一	—	—	七
同 中部	—	—	一	—	—	—	—	—	一	—	—	—	二
同 南部	—	一	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	二
支那計	—	二	四	四	二	一	—	—	二	一	—	—	一六
南洋、印度、歐洲	—	一	—	二	一	—	—	—	—	—	—	—	四
總計	四一	一七	二八	一五	三九	一五	一四	一二	一八	二一	六	一〇	二三六

備考　△印專賣局．×印軍隊

（七）販賣代金回收方法

滿洲製造業者の苦心とするものゝ一は、販賣が現金を以て行はるゝことの少いことである。主として用ふる代金回收方法に就いて（一工場に於て各種の方法を併用するものがある）記入せられたるもの二〇八の中、其約三分の一は掛賣又は長期貸付である。

現金賣方法	一〇五
手形による方法	三〇

掛賣又は長期貸付法	七三
計	二〇八

掛賣又は長期貸付法によるもの、最も甚しきは

釀造、印刷、靴鞄製造、雜業

の諸業にして、現金賣に依るよりも多いか、或は同數かである。次に來るべきものは左の各業である。

窯業、飲食物、製粉精米

然し大資本經營の工場が多い事業、滿鐵、關東廳、其他大會社を相手にする工場の多い事業並に輸出を主とする工場の多い事業にあつては現金、手形に依ること多く、掛賣又は長期貸付は比較的少い。之に屬するものは左の五業であつた。

鐵工業、染織工業、化學工業、油坊業、製材業

代金回收方法に就いて

方法別工場數 業別	現金賣	手形によるもの	掛賣又は長期貸付
鐵工業	一七	五	三
染織工業	八	五	—
化學工業	一一	六	六
油坊業	三	一	一

窯業	二二	三	一四
製材業	七	四	二
飲食物業	七	二	六
製粉精米業	七	四	五
醸造業	四	—	一四
印刷業	七	—	一一
靴鞄製造業	六	—	五
雑業	六	—	六
計	一〇五	三〇	七三

第十章　在滿邦人工業の生產、販賣に當つて苦痛とする所並に其發展の爲に工業家の希望する諸點

以下の敍述も亦回答工場が記入せられたる處を少しく秩序立て說明を加へて羅列したに過ぎない。そして夫は屢述の如く以上の各章に照應するものであり、特に第九章に密接な關係を有するものである。

（一）　生產上苦痛とする點

生產上最も苦痛とする處は原料難、石炭、電力割高、支那人職工の各種問題、仕事の繁閑常なきこと、金融逼迫等である。

原料難　原料難を來す理由に種々ある。

1、原料品質の不良

例へば製材、精米業等に見らる

2、原料を長期保存せねばならぬが、其爲に變質を來す危險があること

例へば製粉精米業の某工場の如き

3、運賃高、支那稅金高等の爲原料の價格高きこと

例へば化學、窯業、製材、釀造業の某工場に於けるが如き

4、奉票暴落による原料買入の困難
例へば染織、化學、釀造、製粉精米業の某工場に於けるが如く
5、原料栽培地獲得の困難
例へば精糖業の如き
6、先進工業國に於けるが如く、總ての材料が直に間に合はぬこと
特に鐵工、化學、印刷、雜業等に多く見らるゝやうである
扨て然らば原料難によつて頗る迷惑を蒙りつゝある事業は何であるか。次の五事業であると推測せられる。
鐵工業、化學工業、製材業、製粉精米業、釀造業
石炭の割高　石炭の割高に苦しむ工場は相當に多い。後述すべき石炭の値下を希望せる工場數をも考慮に入れる時、此點に就いて最も苦痛を成じつゝある事業は左の四業である。
鐵工業、化學工業、油坊業、窯業
尙石炭の割高ではないが、滿洲には石炭の種類が少いことを缺點とせる二三の工場があつたことを注意して置く
電力高　電力の高いことは第五章に於て述べた所である。
染織工業、化學工業、飲食物工業
等の如き、電力を多量に需要する工場の多い事業が其値下を希望するのも當然である。
支那人職工問題　此點も亦勞力の章で述べた處である。支那人使用上に於て困難を感ずる點を列擧すれば

1、職工の移動と職工の爭奪
染織工業、化學工業に於て之を苦痛とする工場が多い。
2、技術優秀なるもの少きこと、職工の養成が困難なること、責任感乏しきこと、思想の惡化
鐵工業、染織工業、窯業、印刷業に於て多く此不平を聞く。
3、奉票相場の不安定は賃銀支拂に頗る不便なること

作業上の困難　作業上の困難には次の如き各種の原因が存在する。
1、長い結氷期を控えて操業の困難なること
2、又は特別の裝置を必要とすること
3、資本小にして設備の不完全なること
4、製品の需要頗る不安定にして仕事の繁閑常なきこと
5、需要製品の種類甚だ多くして能率を擧げ得ないこと
之等の點は、鐵工業、染織工業、窯業、製材業
等の諸業に多く附纏ふ不便である。

金融難　滿洲工業は金融に就いては極度の逼迫狀態にある。金融難を生產、販賣上の苦心點として擧げた工場は少かつたが、然し工業家の希望すべき項目を揭げた所に於ては其逼迫の緩和を望む旨の最も多かつた處から察すれば、重大問題たるを疑はれない。兎まれ生產上資金難に陷つて居るのは

鐵工業の一、化學工業の一、油房業の一、窯業の三、釀造業の一、印刷業の一、計八に過ぎなかつた。

優秀技術者の缺乏

水質の不良

水道瓦斯の設備なきこと

修理工場の無きこと

之等の諸點も亦夫々重大性を有するが、記入極めて少數であつたから、細説を止めて表に載せて置くに留める。

生産上最も苦痛とする點

苦痛別＼業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	雜業	計
(一)原料難	六	一	五	二	五	七	三	四	三	三	一	二	四二
石炭の割高	一	一	六	一	六	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一五
電力料金高	｜	二	三	一	一	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	八
(二)支那人職工問題	一	五	四	｜	四	二	｜	｜	一	二	｜	｜	一九
(三)作業上の困難	六	二	｜	｜	四	二	｜	｜	二	｜	｜	一	一七
資金難	一	｜	一	一	三	｜	｜	｜	一	一	｜	｜	八
優秀技術者の欠乏	一	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	三

水質不良及水道の價格高	—	一	三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	四
水道瓦斯の設備のなきこと	—	—	二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三
修理工場なきこと	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	一

備考　(一)(二)(三)の細別原因に就いては既に説明せる如し

(二)　販賣上苦痛とする點

販路の狭小　販路狹小は種々の原因を有つ。例へば、奉票の暴落、日支同業者の過多並に競爭、日本及外國製品との競爭、需要者の無智、滿鐵消費組合の存在等列擧に暇なき程であるが、玆に述ぶる所は事業の創設が最近の事に懸る爲に商品が一般に知られて居ないこと、又商品が支那の禁輸出品であることを主たる理由とする外、特別に何等の明記なく唯販路の狹小と記入せる工場數に就いてゞある。而して鐵工業、染織工業、窯業、製粉精米業、印刷業、雜業の各業に於ける一乃至二づつ工場は之に屬する。

競爭の烈しきこと　競爭を激烈ならしむるには種々の原因が伏在する。

1、日支人同業者の過多による生産過剩

例へば、鐵工業、化學工業、窯業、印刷業、雜業等にして、其中、後の四者を以て其最たるものとする。

2、日本商品との競爭並に其ダンピング

之に屬するものは鐵工業、油坊、窯業、飮食物業、釀造業である。

3、外國商品との競爭並に其ダンピング

鐵工業、染織工業、化學工業、飲食物工業等に於て此苦痛あり。

4、滿鐵、關東廳等の註文に對する無理な競爭

鐵工業、窯業等に於て相當甚しきが如くである。

需要者の無智　需要者の無智とは、徒らに日本及外國品を好むこと、或は價格の低廉をのみ望むこと、長い間の習慣或は鐵道輸送上の規定によつて或る商標を有する品以外の取引が行はれないこと等を言ふ。それに依つて販賣上最も苦痛を感じて居るものに左の三業がある。

鐵工業、染織工業、印刷業

代金回收の困難　販賣上の苦心點として最も多數の工場によつて數へ擧げられた項目である。其原因として

1、有力な問屋の有せざること

2、內亂、奉票暴落等によつて華商の基礎薄弱となつたこと

3、長期貸付多く現金によること少きこと

等が言はれるが、其中最も苦痛なるは、第三の現金賣の少いことである。それによつて凡ゆる事業が禍せられて居ること勿論であるが、就中著しきは左の四業である。

鐵工業、窯業、製粉精米業、釀造業

支那通貨の暴落　銀の安いことも此中に含まれて居るが、主として奉天票の暴落である。要するに支那通貨の購

賣力減少は滿洲工業にとり直接の大打擊と云はねばならないのであつて、油坊業、製材業の如く輸出を主とする以外の全部は其影響を受けずに濟まされない。殊に事業の性質上支那人を相手とする工場の多い左記のものは非常な苦痛であらう。

染織工業、化學工業、飲食物業、製粉精米業、釀造業

運賃高　獨り滿鐵のみならず、東支鐵道の運賃高、海外航路の運賃高、及運賃高とは言へないかも知れないが、交通の不便、貨車配給の不圓滑等も此　に入れた。左の五業の如きはそれ等に苦しませられるものである。

化學工業、油坊業、窯業、製材業、飲食物業

關稅の不利　內地朝鮮に於ける關稅の不利がある。常に特惠關稅に就いて議論の戰はせらる、所以であつて、左の各業の如き關稅の不利によつて販路を狹められて居る。

化學工業、窯業、製材業

支那稅金の高きこと、又は稅制の亂脈なること　之等によつて惱ませられつゝある事業は次の如し。

染織工業、釀造業、製粉精米業

尙記入工場數は少かつたが、次の如き販賣上の苦心點が存在する。

1、消費組合の存在又は之に納入出來ざること

2、資金難に陷つて居ること

3、需要不安定及商品價格の變動常なきこと

4、支那人を相手とすることの拙劣なること

5、滿鐵其他大會社の支店が消耗品を現地購買せざること

販賣上最も苦痛とする點

苦痛別＼業別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	雜業	計
(一)販路の狹小	一	一	―	―	一	―	―	二	―	一	―	二	八
生産過剰	―	―	一	―	一	―	―	一	一	―	―	一	五
同業者との競爭	一	―	二	―	五	一	一	―	―	五	―	三	一八
日本商品との競爭	一	―	―	二	三	―	一	―	二	―	―	―	九
外國商品との競爭	三	一	二	―	―	―	一	―	―	―	一	―	八
需要者の無智	五	三	一	―	―	―	―	―	―	二	―	―	一一
滿鐵關東廳の註文に對する無理な競爭	二	―	―	―	一	―	―	―	―	―	―	―	三
(二)代金回收の困難	五	―	一	―	八	―	一	四	四	一	二	一	二七
支那通貨の暴落	一	三	二	―	一	―	二	二	五	一	一	―	一八
(三)運賃高	―	一	二	三	三	三	三	―	―	―	―	一	一六
內地朝鮮關稅の不利	―	一	二	―	三	三	一	―	―	―	―	―	一〇
支那稅制の不統一及稅率高	―	二	―	―	―	―	―	一	二	―	―	―	五
資金難	―	―	一	―	―	―	―	一	―	―	―	―	二
消費組合の存在又は之に納入不可能	―	―	―	―	―	―	―	―	一	―	一	―	二

支那人を相手とすること	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	一
滿鐵其他大會社の支店が現地購買せざること	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二	—	—	二
製品價格の變動常なきこと	—	二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二

備考　(一)(二)(三)の細別原因は前述の如し

(三)　在滿工業家の希望と滿洲工業振興策に關する意見

金融難の緩和　金融難の緩和を希望し且つそれが滿洲工業振興策の要諦なりとせる意見が最も多かつた。然らば金融難を緩和する爲に如何なる具體的方策が採られ得べきであるか。此點になると殆ど意見の聞くべきものが無く、僅に二三の工場が、(イ)植民地向金融機關の設置、(ロ)工業銀行の設立を擧げたに過ぎない。

金融難の緩和は各種の事業を通じて希望せる點であるが、特に其意見の多かつたのは、左の六業であつた。

化學工業、油坊業、窯業、製材業、製粉精米業、釀造業

石炭、電力の値下　之は要するに石炭電力を多量に需要する工場の多い事業が希望する點であつて左の六業が最も關心する所である。

鐵工業、染織工業、化學工業、油坊業、窯業、飲食物業

運賃の低減　希望數の多いことに於て次に來るべきものは運賃の低減である。尤も統計上或事業が目立つて之を主張して居るやうには現はれて居ないのであるが、生産上、販賣上に於ける苦心點と對照すれば、大體左の各業に之を希望せる工場の多いことは明かである。

化學工業、油坊業、窯業、製材業、飮食物業

滿洲製品の愛用　此點を力說せる工場は金融難の緩和に關して述べた工場と匹敵する多數に上つて居る。然し等しく滿洲製品の愛用といふも、一般在滿日本人に對する要求と、滿鐵に對する要求とに分れ、而して何れに多く要求を提出して居るか、各事事によつて異ること勿論である。

1、在滿邦人の滿洲製品愛用

鐵工業、染織工業、釀造業

2、滿鐵の滿洲製品愛用

鐵工業、染織工業、化學工業、窯業

3、滿鐵消費組合の納入許可並に沿線に於ける滿鐵其他大會社支店の用品を現地購買すること

釀造業、雜業

特惠關稅の擴張　日本、朝鮮への輸出を忽にすることの出來ない工場を多く有する左の各業は地域並に種目に就いて特惠關稅の擴張を等しく望んで居る。

鐵工業、染織工業、化學工業、窯業、製材業、飮食物業

但し染織、化學の兩業は統計上表はれて居ないけれど、玆に特別に揭げた所以は販賣上の苦心點を列擧せる時、日本朝鮮の關稅を以て頗る不利として居つたからである。

滿鐵關東廳等の援助　(イ)有望な特殊事業を徹底的に援助せよといふもの、(ロ)現在の產業助成費を更に有効な

らしむる爲に事業に對する特別の研究調査を望むこいふもの、(ハ)販路開拓に對して特別の後援指導を俟つこいふもの、(ニ)将又農業倉庫を設置して原料の出廻、貯藏に便ならしめ、且つ農業振興策の一助たらしめよこ主張するもの、(ホ)設備の改善、機械の据付け等に當つては相當の援助を望むこいふものあり、漫然こ助成金下附を云々せざりしこは誠に意を強ふせしめる。

鐵工業、染織工業、化學工業、油坊業

等の中には此痛切な叫びをなせる工場が多かつた。

税金の輕減

1、支那税則の確立及税率低下

2、輸出護照料の低減こ手續の簡便化

3、關東州營業税の撤廢

等種々の項目に亙つて居た。此主張をなせる工場の多いのは左の三事業である。

化學工業、製粉精米業、釀造業

惡ブローカーの撲滅 惡ブローカーの撲滅を撲ぶ聲而してその一策こして共同販賣を提唱せるものも相當多かつた。

化學工業、釀造業、印刷業、雜業

事業家の努力 滿洲工業家の努力が未だ足らないこは好く聞く處である。之に就いて六工場主が回答を寄せられ

て居た。其努力の向ふべき所は種々あるであらうが、次の四點は味ふべき文字ではなからうか。

1、事業創始に當つては、事前調査を精密適確になすこと

2、株主其他が良く事業を理解して徒らに配當を望まないこと

3、支那人を相手とすることに更に努むること

4、廣告宣傳に力を入れること

調査機關其他に關する希望　之等の希望も其實現は主として關東廳、滿鐵に依るべきものである。

1、能率增進に關する研究

2、技術者、優秀職工養成機關の設立又は現存機關の改善

3、產業一般の徹底的調查

4、良事務員を容易に得られるやう特別の考慮を拂ふこと

支那側に對する各種の要望

1、日本の援助に依つて滿洲財政並に幣制改革を行ふこと

染織工業、釀造業に於て希望する向が多かつたが、之は一般事業家の望む所であらう。

2、商租權問題の解決

日本人朝鮮人の手による滿洲農業の發達、それによつて原料を豊富にすることは在滿工業家の等しく望む所であるが。砂糖工業、製材業、精米業に於て殊に其感が深い。

3、防穀令の廢止

漸く輸出旺盛ならんとしつゝある製粉精米業の最も望む所である。

4、税金に關する改革

之は税金の輕減といふ項目で述べた所と同一である。

尚希望すべき次の諸點が數へられるが、其中現金賣となすべきことは統計に殆ど全く表はれて居ないけれど、販賣上の苦心點を讀まれた者には重要なる點として直に首肯出來る所であらう。

1、現金賣とすること

2、大資本にて經營すること

3、建築法の改正による工場固定資本の輕減

4、地價の輕減

5、置籍船問題の解決

6、組合法の制定

滿洲工業振興の爲に希望さるゝ點

業別／希望別	鐵工業	染織工業	化學工業	油坊業	窯業	製材業	飲食物業	製粉精米業	釀造業	印刷業	靴鞄製造業	雜業	計
(一)金融難の緩和	一	―	七	三	四	二	一	二	二	一	―	―	二三

滿洲製品の愛用	五	一	―	一	一	―	―	―	二	―	―	―	一〇
滿鐵、關東廳等の滿洲產愛用	二	一	三	―	二	一	―	―	―	一	―	一	一一
滿鐵消費組合納入許可及現地購買	―	―	―	―	―	―	―	―	一	二	―	二	五
石炭電力の値下	三	二	六	二	四	―	二	―	―	―	―	一	二〇
運賃の低減	一	―	二	一	二	二	一	一	一	―	―	―	一一
特惠關税の擴張	二	―	―	一	一	三	―	一	一	―	―	一	一〇
(二)滿鐵關東廳等の援助	二	二	三	一	―	―	一	一	―	―	―	―	一〇
(三)税金の輕減	一	―	二	―	―	―	―	二	四	―	―	―	九
惡ブローカーの撲滅及共同販賣	―	―	一	―	―	―	―	―	一	四	―	一	七
(四)事業家の努力	一	―	三	―	―	―	一	―	―	一	―	―	六
(五)調査其他に關する機關の設立及改革	一	―	三	―	―	―	―	―	―	一	―	―	五
(六)支那側に對する要望	―	二	―	―	―	一	―	七	三	―	―	―	一三
(七)現金賣とすること	―	―	―	―	―	―	―	―	一	一	―	―	二
大資本經營	一	―	―	―	―	―	一	―	―	―	―	―	二
建築法及其他法令の改正	二	―	二	―	―	―	―	―	―	一	―	―	五
其他	―	―	―	―	―	―	一	―	―	―	―	―	一

備考 (一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)に於ける具體策其他細説は前述の如し

昭和三年二月二十日印刷
昭和三年二月廿五日發行

編輯兼發行人　南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課
佐田弘治郎

大連市近江町九十一番地
印刷人　山田浩通

大連市近江町九十一番地
印刷所　東亞印刷株式會社大連支店

發行所　南滿洲鐵道株式會社